

岩手県埋文センター文化財調査報告書第5集

江刺市 沼の上遺跡

(昭和52年度)

(財)岩手県埋蔵文化財センター

沼 の 上 遺 跡

1. 遺 跡 所 在 地 江刺市愛宕字沼の上
2. 事 業 主 体 岩手県
3. 調 査 主 体 (財)岩手県埋蔵文化財センター
4. 調 査 担 当 者 専門調査員 山口了紀
5. 調 査 期 間 昭和52年10月17日～11月30日
6. 調 査 面 積 6,000m²
7. 発 掘 面 積 2,000m²
8. 遺 跡 記 号 NU77
9. 協 力 機 関 江刺市教育委員会 江刺土地改良事業所

目次

I. 発刊のことば	2
II. 調査に至る経過	3
III. 遺跡の位置・地形	5
IV. 調査の方法	6
V. 標準層位	6
VI. 調査の結果	7
VII. 出土遺物	14
VIII. ま と め	20

図版目次

図版1. 遺跡位置図	4
図版2. 層位柱状図	6
図版3. トレンチ配置図	23
図版4. トレンチ24平面図・断面図	24
図版5. トレンチ1断面図、トレンチ18平面図・断面図	25
図版6～7. 土器実測図	26
図版8～12. 土器拓影図	28
図版13. 石器実測図	32
図版14. トレンチ16集石遺構平面図	22

写真図版目次

1. トレンチ24拡張部全景・土器出土状況・トレンチ23焼土・土器出土状況	34
2. トレンチ24集石遺構・トレンチ1・18土器出土状況	35
3. トレンチ18・23・24土器出土状況	36
4. トレンチ1土器出土状況・断面図・トレンチ16集石遺構	37
5. トレンチ27落ちこみ部断面図・炭火材・トレンチ28溝断面図	38
6～7. 土 器	39
8. 石器・クルミ・雲母鉄鉞	41
9～12. 土 器	42

I. 発刊のことば

岩手県においては、安定した農業を目指し、広く農業基盤整備事業を推進いたしておる所があります。

ご存知のように岩手県は遺跡の豊庫といわれており、その数の多き事はもとより、自然の状態で保存されていることが、そう呼ばせる所であります。当沼の上遺跡もその中の一つであります。

岩手県内の遺跡の多くは、縄文時代・奈良時代・平安時代であります。弥生時代の遺跡は非常に少なくなっております。胆江地方は古くから文化が栄え、角塚古墳、胆沢城跡など国指定遺跡が存在し、弥生時代遺跡としては常盤遺跡が存在しております。このような事から岩手県における古代稲作の中心地方であったと考えられております。

当沼の上遺跡は昭和45年江刺市教育委員会によって、弥生時代遺跡として明らかにされたものであります。

沼の上遺跡の所在する江刺中央地区において、圃場整備事業計画が持ち上がり、保存問題が関係機関において精力的に協議され、保存を目指して努力を重ねられておる所であります。

県教育委員会より調査の委託を受けました県埋蔵文化財センターにおいては、遺跡の重要性を認識し、完全な確認調査いたすよう最大の努力を傾注いたしました所であります。幸い県教育委員会の全面的なご指導を頂き、江刺土地改良事業所、江刺市教育委員会、江刺市土地改良区のご協力ご援助を頂き、又地権者各位のご理解を得ることができ、調査を予定通り終了することができました事を心より感謝申し上げます。

ここに報告書を上梓するに当り、本書が学術研究の資料として広く各界にご活用頂くことを願って止みません。

発刊に当り、誠心誠意調査・整理に当られた調査担当者及び、発掘調査協力員、整理協力員各位に心からお礼申し上げます。

昭和53年3月

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 畑 山 新 信

Ⅱ. 調査に至る経過

岩手県は、農業経営の安定を図るために農業基盤整備事業を推進している。

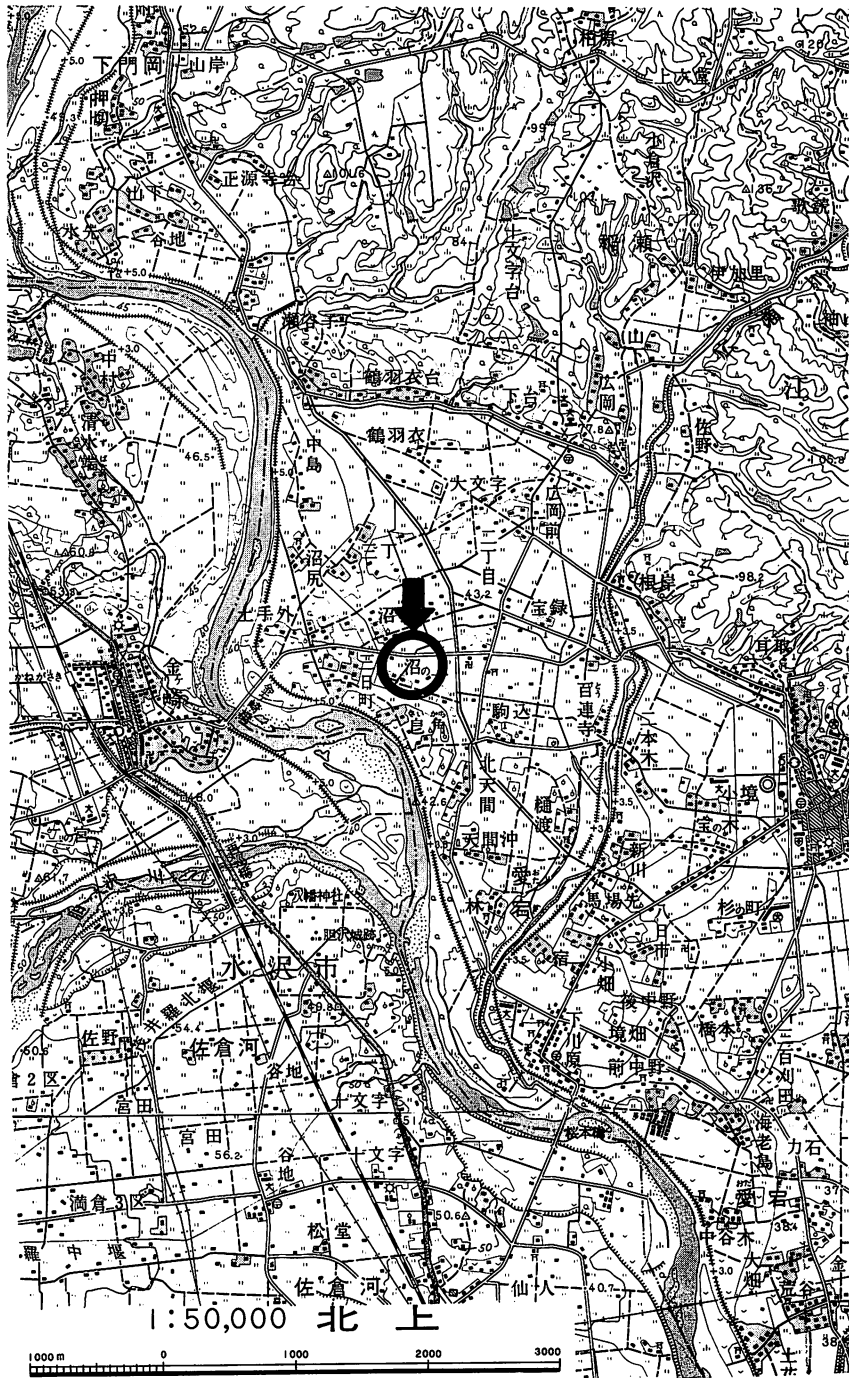
江刺中央地区圃場整備事業もその一つとして行なわれているものである。この事業計画区域はほとんどが水田で、僅かに宅地周辺に畑地が存在し、遺跡の所在が確認されたのは、本遺跡のみである。

本遺跡は、昭和45年3月江刺市教育委員会によって一部が調査され、県内における有数な弥生式土器を出土させる良好な遺跡であることが確認されていた。この貴重な遺跡を保護するため、県教育委員会は50年4月から事業主体である岩手県江刺土地改良事業所と協議を重ねた。遺跡の保存は受益者の同意も必要とすることから、どの範囲まで保存する必要があるのか至急調査をすることが必要となった。昭和45年調査においては遺跡範囲は確認されておらず広範囲にわたるであろう予測のみであった。

県教育委員会は、本遺跡の範囲確認を行なうため、昭和52年度補助申請を文化庁に提出し認められた。

昭和52年補助を受けた県教育委員会は、昭和52年4月設立された岩手県埋蔵文化財センターに調査委託を行なった。

調査は岩手県江刺土地改良事業所と県教育委員会との協議にもとづき、水稲刈入れを待って行うこととした。期間は昭和52年10月17日から11月30日までである。調査は畑地として事業除外される部分をのぞき、水田部分を中心に、畑地部分でも水路予定地を主に行なう事とした。稲刈り直後のため稲架けなどがあり、当初計画に狂いが生じたが、当初目的である範囲確認は予定通り11月30日をもって終了することができた。



「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである(承認番号)昭和53東複,第161号」

図版1 沼の上遺跡位置図

Ⅲ. 遺跡の位置、地形

沼の上遺跡は、江刺市の中心部から西北西の方向に3.5km離れ、東北本線金ヶ崎駅から東の方向に3km離れた県道江刺ー金ヶ崎線にそって、県道の南側に位置している。また、北上川にかけられている金ヶ崎橋から東に1.5km離れている。地籍は江刺市愛宕字沼の上である。(第1図版)北上川は、現在瀬谷子、金ヶ崎橋、^{さいかち} 梶角付近で、直角に右折、左折の蛇行を繰返しながら南下している。当遺跡は、この北上川流域に広がる北上平野における沖積段丘の古期の微地形上に存在し、周辺は、沖積段丘新期の低水田地帯である。遺跡の東側1.5kmには、北上川の支流広瀬川が流れている。沖積段丘古期の微地形は、北上川と広瀬川にはさまれた地帯において17ヶ所確認され、その微地形の一つが当遺跡である。周辺に存在する遺跡を遺跡分布地図により摘出すると瀬谷子遺跡等20数ヶ所を数える。遺跡は、時代的に奈良、平安時代のものでその中の多くは、沖積段丘古期の微地形上に位置している。当遺跡の周辺は、北上川の冠水を免がれていたということである。住民は、常に冠水という自然条件より集落を守るために、古代より微地形を利用し、集落として占地していたものと思われる。微地形上にある当遺跡の標高は、43m±である。地形は、遺跡の北側を最高位面として、北上川の方へゆるやかに傾斜していく。北上川寄りの低位水田面との標高差は2m±を測る。

沼の上周辺遺跡一覧表

遺跡名	類別	場所	遺跡名	類別	場所
中島遺跡	△	江刺市稲瀬字中島	駒込遺跡	☆	江刺市愛宕川西字駒込
十三遺跡	△	〃 多倉沢字十三	東間遺跡	△	〃 〃 字駒込
沼尻遺跡	△	〃 沼尻	阿弥陀堂遺跡	△	〃 〃 字前天間
宝録遺跡	△	〃 照沢字宝録	別当遺跡	△	〃 〃 字別当
沼館遺跡	☆	〃 字沼館	前天間遺跡	△	〃 〃 字前天間
鶴羽衣遺跡	△	〃 字鶴羽衣台	北天間遺跡	△	〃 〃 字北天間
鶴羽衣台遺跡	△	〃 字鶴羽衣台	林遺跡	△	〃 〃 字林
五十瀬神社前遺跡	△	〃 字照中島	馬場先遺跡	△	〃 〃 川東字馬場先
瀬谷子遺跡	△	〃 字瀬谷子	橋本遺跡	○	〃 〃 田谷字橋本
岩間遺跡	○	〃 字岩間	百蓮寺遺跡	△	〃 岩谷堂沖字百蓮寺

類別 ○ー縄文期 △ー土師・須恵期 ☆ー城柵

埋蔵文化財分布地図(岩手県教育委員会)
昭和49年3月発行より

IV. 調査の方法

今回の調査は、江刺中央地区圃場整備事業に伴う遺跡範囲の確認を目的として行なわれたものである。遺跡の範囲を東西360m±×南北300m±の107,900m²と推定し、このうち6,000m²の調査溝をあける予定を立てて調査に入った。昭和45年3月に江刺市教育委員会によって発掘調査がなされた部分については、遺跡の存在が確認されておるので除外し、その他の地域を重点的に行なった。

遺跡の地形は、昭和45年調査の畑地を最高位面とし、南方向へ漸次低位面になっていく。これらの面を高位より第一面（標高43.80m～44.10m）、第二面（標高43.45m～43.80）、第三面（標高43.10m～42.45m）、第四面（標高42.75m～42.10m）と呼称することとした。調査は各面の縁辺部に沿って、巾1.5mの調査溝を設定して行ったが、稲架けや畑作物のため、計画通りにはいかなかった。調査は、層序確認の試掘を人力によって行ない、その後表土除去をバックホウを導入して行なった。

試掘において、層序を確認した段階において、次のような調査方針を固めた。

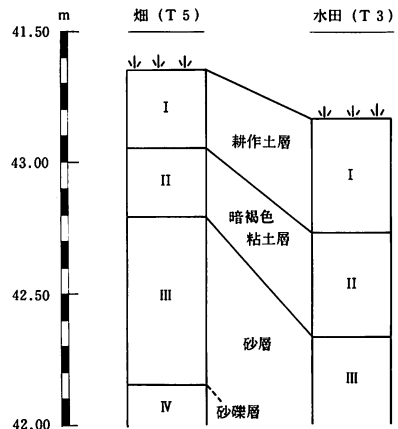
- 1、層位に従って土の除去を行なう。
- 2、第Ⅰ層は、バックホウで土で除去する。……遺物は第Ⅱ層上面から出土
- 3、遺構が検出され、または遺物包含層が検出された場合は、そこで調査を打切る。
- 4、遺構の性格を調査するため、一部を拡張する。
- 5、遺構、遺物については、できるだけ実測を行なう。
- 6、調査は、面を中心として大きく範囲をつかむ。
- 7、調査後は、埋戻しを行なう。

V. 標準層位

当遺跡は、過去三回にわたって圃場整備事業が行なわれ、現在水田になっている部分が多い。

今回調査した各トレンチにおける層位には、大きな違いがみられず、次の四つに分けられた。

第Ⅰ層（黒褐色土層） 層厚で30cm±を測る耕作土層である。この層は、上下の二層（Ⅰa、Ⅰb）に分かれる。Ⅰb層には、小粒炭化物が包含



図版2 沼の上土層柱状図

されているトレンチが多かった。遺物がまとまって出土したトレンチで、第Ⅱ層への落ち込みではないかと思われる部分のみられたし、小礫を含んで固く締った中に土器細片、石器剥片が包含されていた。

第Ⅱ層（暗褐色粘土層） この層は、シルト層であり、トレンチによって厚薄がみられた。厚いところで50cmをこえたが、平均に30cm±の層厚と考えられる。全体的に締っており、遺物が出土しているトレンチでは、小粘の炭化物も含まれている。当遺跡における遺物包含層であるし、溝や集石遺構のほとんどは、この層の上面で検出されている。

第Ⅲ層（暗褐色砂層） この層でも、トレンチによって厚薄がみられた。厚く堆積している部分では、下層になるほど砂の粒子が粗くなっており、ちょっと黒ずんだ細い帯状の層により三層ほどに細分される。細い帯状の層は、洪水等による冠水の時間的な相違をおしえているのかもしれない。

第Ⅳ層（砂礫層） この層は、今回の調査での最下層であり、200cmをこえる厚さになっている。第Ⅲ面の南で、この層の隆起が確認された以外は、地表から150cm±を測る付近からはじまっていた。

Ⅵ. 調査の結果

遺跡内の現地形を四面にとらえ、各面の縁辺部に、28本のトレンチを設定し、調査した。低位の第四面より調査し、高位面へと移行する計画であったが、水田面では、稲干しの時期のため稲架けがあったり、畑地面では、作物が植えられていたため計画どおりにトレンチを入れることが出来なかった。（そのため、トレンチ番号に統一性がない。）調査結果の報告は、高位面の第一面から第四面への順で行ない、各面でのトレンチについては、北側から南側へ順をおって記述している。なお、各面の見出しで○で囲んでいるトレンチ番号は、畑地面のトレンチであることを示している。（トレンチ位置については、図版3を参照）

〈第一面〉（T23、T24）

この面は、昭和45年に調査された畑地を含み、標高42.80mから43.10mにあり、当遺跡での最高位面である。トレンチを入れた水田は、七、八年前に造成され、その際、土器片が出土していた。

○T23 現状水田面。東西方向に入れたトレンチである。第Ⅱ層上面、地表より28cm±を測る面まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層は、耕作土層、第Ⅱ層は、シルト層である。遺構は、トレンチの西側寄りⅠb層面で焼土まじりの赤褐色土を検出した。（写真図版1）この赤褐色土の部分は、東西80cm±×南北60cm±の規模をもち、層厚12cm±を測る。褐色土を主体に少し

ブロック化した焼土と炭化物がまじっており、第Ⅱ層を少し掘り込んだ形で検出された。検出面がⅠb層であることから住居址外炉とも考えられるが、純粹なる焼土面がみられないし、炉囲い遺構もみられないことからカマド灰の投棄されたものか焚き火跡と考えられる。周辺に住居址は確認されなかった。出土遺物は、Ⅰb層で土器細片と石器剥片、第Ⅱ層上面で復元可能な土器、他に打製石器2個が出土している。また、雲母鉄鉱3個(160g)も出土している。

(写真図版8)

○T24 現状水田面。昭和45年の調査地点である畑地面の東側10数メートル離れたところに東西方向に入れたトレンチである。西側寄りに土器がまとまって出土したので、トレンチの北側に72㎡土拡張し、最初に入れたトレンチの西端寄り部分をQ1と決め、拡張部を四つに分けて、時計の針と逆方向にQ2、Q3、Q4、Q5と定めて調査したが、Q5に検出された集石遺構を中心に遺物の出土がみられたので、Q1、Q2、Q5を調査することにした。集石遺構を中心に第Ⅱ層下部、地表より35cm土を測る面まで調査した。層位は、第Ⅰ層是水田耕作土、第Ⅱ層はシルト層である。遺構は、拡張部に集石遺構と、その北側外に白色粘土塊、西側壁近くに溝一条を検出した。集石遺構は、東西140cm±×南北130cm±の規模をもち、検出面は、遺物包含層と同じ第Ⅱ層上面である。集石の形状は、不整形であり、長軸20cm±の石30個と長軸8cm±の石40個で構成している。周辺にかつては、集石を構成していたと思われる石が数個みられた。構成している石は、すべて川原石である。集石を全体的に見た時、石の組合せに規則性はみられなかったし、方位との関連も認められなかった。部分的に見た時、南端部付近で大きな石が円形状に組み合わされているのではないかと感じられた。小さい石は、大きい石の隙間を埋めている。集石の北側外に熱を受けたと思われる大きい石が1個あるだけで、その他に焼土や炭化材は出土していない。集石の中心部は、石組が二段みられ、その下は砂になっていた。内部に遺物はなかった。集石の周囲に掘り込み部が確認された。灰白色粘土塊は、40cm±×30cm±の規模をもち厚さ5cmである。層序に灰白色粘土層はみられないので、他所から持ち込まれたものである。今回の調査で、灰白色粘土塊が検出されたのはここ一ヶ所だけである。西側壁近くで検出した溝は、南北方向に走っており、巾は、34cm±を測る。検出面は、第Ⅱ層上面であり、集石遺構面とほぼ同一面、地表面より、35cm±を測る地点でその痕跡を失う。出土遺物は、Ⅰb層で土器細片と石器剥片がみられ、第Ⅱ層では、集石遺構の周辺に特に集中してみられた。復元可能な土器、石器、炭化したクルミ1個が出土した。集石遺構周辺での出土状況は、集石直上、石間にもみられ、集石の西側160cm±離れて検出されている溝内からも土器片が出土している。(図版4 写真図版1、2、3)

〈第二面〉(T2、T13、T14、T15、T17、T18、T25、T26、T27)

この面は、標高43.45m～43.80mにあり、第一面を囲む形で位置している。トレンチを数多

く入れたが、北部（T2、T17、T18）、中央部（T25、T26、T27）、南部（T13、T14、T15）の三つに分けることができる。

北部は、県道に近い水田地帯である。T17とT18の間は畑地である。

○T2 現状水田面。東西方向に入れたトレンチである。第Ⅱ層下部、地表より42cm土を測る面まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層である。遺構は、検出されなかった。出土遺物は、第Ⅱ層上面から石器の剥片1個と土器の小破片1個である。

○T17 現状水田面。南北方向に入れたトレンチである。第Ⅲ層上面、地表より60cm土を測る面まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層、第Ⅲ層は砂層であり北端に近づくにしたがって、第Ⅱ層が薄くなっていた。遺構は、検出されなかった。出土遺物はトレンチの南端、第Ⅱ層上部から、須恵器の小破片1個である。

○T18 現状水田面。南北方向に入れたトレンチである。第Ⅱ層上部、地表より41cm土を測る面まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層であり、T17同様、北端に近づくにしたがい第Ⅱ層は薄くなっていた。遺構は、検出されなかったが、トレンチの南側寄りに、6m土にわたり復元可能な土器、石器の剥片がまとまって検出した。出土面は、第Ⅱ層上面である。（図版5）（写真図版2、3）

中央部は水田地帯と畑地である。

○T25 現状水田面。南北方向に入れたトレンチである。第Ⅲ層上面、地表より29cm土を測る面まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層、第Ⅲ層は砂層である。水田化したとき、かなり削平をうけたとみられ、第Ⅱ層はかなり薄く、第Ⅲ層に続いていた。遺構は、検出されなかった。出土遺物は、第Ⅱ層下部から、土器細片2個である。

○T26 現状水田面。南北方向に入れたトレンチである。トレンチ外の西側は、遺跡内の最高位面に近い畑地である。第Ⅱ層上部、地表より43cm土を測る面まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層である。第Ⅱ層は、検出した溝の精査で確認するとかなり厚く60cm土にもなっていた。遺構は、集石遺構と二条の溝を検出している。集石遺構は、トレンチの南端に近い西壁ぞいに検出された。検出面は、第Ⅱ層上面であり、南北90cm土を測る巾で確認された。集石は長軸10cm土の玉石で、締りがみられず、寄せ集められたものと考えられる。時間的制約から集石の全面調査はしていない。集石遺構より、6m北側に検出した溝は100cm土の巾で東西方向に走っている。検出面は、第Ⅱ層上面である。掘り込み部分は、検出面から65cm土測り、第Ⅲ層へくい込む深い溝である。この溝の埋土は黒色土中に暗褐色粘土がまじっており、少量ながら炭化物も包含していた。次に、トレンチ北端近くで検出した溝は40cm土の巾で東西方向に走っている。検出面は第Ⅱ層上面であり、掘り込み部分は検出面より20cm土を測る。この溝の埋土は、水田耕作土の混入がみられた。二条の溝から遺物は出土して

いない。トレンチの出土遺物は、中央部東壁ぎわと北端近くから土器が数片である。出土面は第Ⅱ層上部である。

○T27 現状畑地。南北方向に入れたトレンチである。作物の関係で2本に分かれ、北からQ1、Q2と呼称した。第Ⅱ層下部、地表より、50cm土を測る面まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層耕作土、畑地なので、I b層は水田面ほど堅く締っていない。第Ⅱ層はシルト層である。遺構は、Q2中央部で東側壁に、第Ⅱ層を15cm切り込んでいる落ち込み部分を検出した。落ち込み部分の埋土は、黒色土に暗褐色粘土が混入しており、わずかながら炭化物も含まれていた。地表より落ち込み検出面までの深さは35cm土を測る。この落ち込み部分は、隅丸形状の隅の部分と思われる。さらに、この落ち込み部分から10cm土北側で、地表より50cm土を測る第Ⅱ層中より炭化材の出土をみた。(写真5)時間的に追求調査ができず、落ち込み部及び炭化材が住居址に連がるか否かはわからない。(写真5)他に出土遺物として、Q1南端から弥生式土器口縁部が出土している。出土面は第Ⅱ層上面である。

南部は、北上川に近い方の水田地帯であり、このトレンチでは、第Ⅳ層砂礫層の隆起が確認された。

○T13 現状水田面。南北方向に入れたトレンチである。第Ⅳ層上面まで調査した。第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層、第Ⅲ層は砂層であり、第Ⅱ層、第Ⅲ層は薄かった。トレンチの北端で第Ⅳ層の砂礫層が地表より46cm土を測る浅い地点で検出されたので、トレンチの中央部と南端でも1m巾で部分的に第Ⅳ層上面まで掘り込み調査した。第Ⅳ層上面は、中央部で地表より48cm土を測り、南端では地表より56cm土を測った。この結果、第Ⅳ層は北から南の方向へ緩傾斜して隆起していることが確認された。遺構は検出されなかったし、遺物も出土しなかった。

○T14 現状水田面。T13の北側に南北方向に入れたトレンチである。第Ⅱ層上部、地表より35cm土を測る面まで調査した。第Ⅰ層は耕作土層であり、第Ⅱ層はシルト層である。遺構は、トレンチ中央部で巾35cm土で東西方向に走る溝一条を検出した。検出面は、第Ⅱ層上面であり、第Ⅲ層上面まで掘り込みが確認されたが浅い溝である。このトレンチ周辺に最近まで家があったそうであるが、その家に関する溝なのかも知れない。出土遺物はなかった。T13で確認された第Ⅳ層の隆起の有無をボーリング棒で全面調査した。その結果、地表より45cm土の深さで隆起が確認された。

○T15 現状水田面。T13、T14に直交するように東西方向に入れたトレンチである。トレンチの東端寄り、T13、T14の延長線上に巾150cm土の帯状に、第Ⅳ層が隆起状態で検出された。検出面は、最も高い礫面で、地表より10cm土の深さのI b層直下であった、この最高位礫面を頂点として、第Ⅳ層は西方向に緩傾斜していた。第Ⅳ層の傾斜面に沿って第Ⅲ層が薄くの

っており、その上層に第Ⅱ層が厚く堆積していることが確認された。第Ⅰ層は耕作土層である。遺構として、トレンチの中央部北壁ぎわに80cm×70cm規模をもつピットを検出した。検出面は第Ⅱ層上面であり、形状は円形、掘り込み部は、厚い第Ⅱ層までで地表より68cm土を測る。埋土に耕作土の混入がみられ、遺物も出土していない。他にトレンチの出土遺物は、第Ⅱ層上部から土器の破片1個である。

〈第三面〉(T1、T3、T④、T⑤、T6、T7、T8、T16、T19、T20、T21、T22、T⑳)

この面は、標高43.10mから43.45mにあり、水田面が多く、第Ⅱ面の外側を扇形に囲む形に位置している。トレンチの本数は一番多い。第二面と同様、北部(T1、T3、T19、T20、T21、T22)中央部(T④、T⑤、T⑳)、南部(T6、T7、T8、T16)の三つに分けることが出来る。この面の水田は、昭和20年代から造成されたようだ。今回の調査では、この面まで遺構、遺物が確認された。

北部は、水田地帯であり、かつて、畑時代にホップ支柱穴掘り作業中に完形の壺形土器らしき土器が出土したと地主から聞かされた。その土器は、現存していない。

○T1 現状水田面。南北方向に入れたトレンチである。トレンチの南側寄りに、層位調査のため深掘りを行なったが、その他の部分は、第Ⅱ層上部地表より40cm土を測る面までの調査である。層位をみると、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層、第Ⅲ層は砂層、第Ⅳは砂礫層である。遺構は、トレンチ中央部、第Ⅱ層上面で、巾5m土を測るうすい黒褐色土の部分が検出された。この部分を西側壁断面でみると小礫を含むI b層の落ち込み部分として確認できた。検出された部分が、隅丸方形の一部分とすれば、東側隅と考えられる。追求調査ができなかったので、住居址等の遺構に関連するか否かわからない。出土遺物は、うすい黒褐色土面上を中心としてまとまった土器が出土している。土器の出土量に比較して、石器の剝片の出土量は、T18、T23、T24でみられたようではなく、少なかった。次に、深掘りした部分から、鉢形土器の一部分の出土をみた。検出面は地表より、85cm土を測る地点で砂礫層上面とみられた。

(図版5)(写真図版2、4)

○T3 現状水田面。南北方向に入れたトレンチである。かつて、ホップの支柱穴掘り作業中に土器が出土している水田である。第Ⅲ層上面地表より37cm土を測る面まで調査した。第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層、第Ⅲ層は砂層である。水田造成時に削平をうけたためか、第Ⅱ層が薄かった。遺構は、ホップ支柱穴痕を二ヶ所で検出しただけであり、出土遺物もなかった。

○T19 現状水田面。T1で出土した土器の広がりを確認するため、T1に直交する形で東西方向に入れたトレンチである。第Ⅱ層下部、地表より30cm土を測る面まで調査した。層位をみ

ると、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層である。トレンチの西側部分の浅い地点で砂礫層がみられた。水田造成時に、T3と同様にだいぶ削平をうけ、第Ⅱ層がうすくなっていた。遺構は検出されなかった。出土遺物は、トレンチの東端から土器11片、中央部付近から2片である。出土面は第Ⅱ層上面であり、東端部の出土状況は、巾1m±に散在していた。T1の遺物出土面の広がりに関係があるのかもしれないが、出土面はT1より浅い面である。

○T20 現状の水田面。東西方向に入れたトレンチである。第Ⅲ層上部、地表より55cm±を測る面まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層、第Ⅲ層は砂層である。第Ⅱ層のシルトが少し厚くなっていた。遺構は検出されなかったし、遺物も出土しなかった。

○T21 現状水田面。東西方向に入れたトレンチである。第Ⅱ層下部、地表より55cm±を測る面まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層である。遺構は、焼土と溝二条を検出した。焼土の部分は、トレンチ中央部南壁で検出された。検出面は表土より54cm±を測る第Ⅱ層下部であり、巾40cm、層厚2cmの規模である。焼土に伴う掘込みの確認はできなかったが、周辺に小粒炭化物の量が多かった。この焼土をはきむように、焼土から1m東側の位置と、4m西側の位置に、それぞれ溝が検出された。検出面はともに第Ⅱ層上面である。東側で検出した溝は、巾40cm±を測り、南北方向に走っているし、西側で検出した溝は、巾60cm±を測り、南西から北東方向に走っている。検出した焼土と溝との関連、溝と溝との関連、及び焼土に関連する住居址等の調査は、時間の関係上していない。出土遺物は、第Ⅱ層上部で土器片2個である。

中央部のトレンチは、畑地の東端に沿って入れたものである。東端は、畑地での最低位面である。畑地なのでIb層はそんなに堅く締っていない。

○T28 現状畑地。南北方向に入れたトレンチである。検出した溝の底部地表より70cm±を測る地点まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層、第Ⅲ層は砂層である。第Ⅱ層はかなり厚くなっている。遺構として、溝一条を検出した。トレンチの北端から中央部の東側壁で切られるまで、巾40cm±を測り、長さ30cmにわたっていた。検出面は、第Ⅱ層上面であり、溝底は第Ⅲ層上部である。埋土は黒色土に暗褐色粘土が混入しており、少量の炭化物を含んでいる。溝及び他の場所から遺物は出土しなかった。トレンチに平行するように東側水田面にT9を入れたが、溝の延長部分は確認できなかった。

○T4 現状畑地。T28の南側に南北方向に入れたトレンチである。第Ⅱ層上部、地表より40cm±を測る面まで調査した。層位をみると第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層はシルト層である。遺構は、トレンチ中央部で東西方向に走る溝を一条検出した。検出面は、第Ⅱ層上面であり、掘り込み部は地表より68cm±を測り、第Ⅱ層下部までである。埋土は、耕作土に暗褐色粘土が混入していた。トレンチからの出土遺物はない。

○T5 現状地面。T4の南側に南北方向に入れたトレンチであり、北端で深掘りし、層位調査をした。層位は、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層、第Ⅲ層は砂層、第Ⅳ層は砂礫層である。遺構は検出しえなかったし、遺物も出土していない。

南部のトレンチは、遺跡の南端にある水田地帯に入れたものである。層位をみるとT8で第Ⅱ層がかなり厚くなっていた。このことは、第三面の南部T15で、第Ⅱ層が西方向に厚くなっていくことを報告しているが、その延長上にあることを示している。また、第三面でみられた第Ⅳ層の隆起は、この面では確認できなかった。

○T6 現状水田面。東西方向に入れたトレンチである。第Ⅱ層下部、地表より55cm±を測る面まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層であり厚いようだ。遺構は検出されなかった。遺物は、トレンチ中央部の第Ⅱ層上部で、甕一個体分が出土した。出土状況は、巾5m±に2ヶ所に分かれた状態であり、埋甕とは考えられない。また、石籠状石器が、第Ⅰ層下部から出土している。

○T16 現状水田面。T6の西側に東西方向に入れたトレンチである。第Ⅱ層下部、地表より65cm±を測る面まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層は耕土層、第Ⅱ層はシルト層である。遺構は、集石遺構と溝一条を検出している。集石遺構は、トレンチの西側寄り南壁ぎわに、地表より40cm±を測る第Ⅱ層上部で、東西80cm±×南北100cm±の規模で検出された。形状は不整形であり、石組に規則性はみられない。集石を構成している石は、長軸20cm±を測る川原石である。集石内部から遺物は出土していない。(写真図版4)第Ⅱ層上部で検出された溝は、トレンチの中央部で巾60cm±を測り、南北方向に走っている。埋土は黒色土に暗褐色粘土が混入していたし、炭化物も少量ながらみられた。この溝の東側に10m±を測る巾にあらい粒子の砂の面を検出した。検出面は、第Ⅱ層下部である。踏みかためたように固い地盤になっていることから、第Ⅲ層上面とはいえない。

○T7 現状水田面。T16の北西側に南北方向に入れたトレンチである。第Ⅱ層下部、地表より80cm±を測る面まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はシルト層である。遺構は、ホップの支柱穴を検出したただけであり、遺物は出土しなかった。

○T8 現状水田面。T7の北側に南北方向に入れたトレンチである。第Ⅱ層下部、地表より80cm±を測る面まで調査した。層位をみると、第Ⅰ層は耕作土層、第Ⅱ層はかなり厚いシルト層である。遺構は、トレンチ中央部、第Ⅱ層上面から巾60cm±を測る。東西方向に走る溝を一条検出した。掘り込み部は地表より68cm±を測り、第Ⅱ層までである。埋土は、黒色土に暗褐色粘土が混入している。出土遺物は、トレンチの南端第Ⅱ層上面で須恵器の小片1個だけである。

T8の西側、道路をはさんで北上川寄りの低位水田面へ下っていく傾斜地上に、竜神を祭る小さな社があり、社の前にちょっとした広場が残されている。この広場の傾斜面は、昔からの

生活の面として、ある程度原形をとどめ、沼の土の微地形の西側における裾部にあたっているのではなからうか。

〈第四面〉（T9、T10、T11、T12）

この面の標高は、42.75mから43.10mであり、今回の調査区域内の最低位面である。昭和初期に圃場整備された水田地帯である。各トレンチにおいて、第Ⅰ層下に、第Ⅲ層の砂層があり砂は酸化鉄分のためあかちゃけていた。第Ⅱ層は認められても薄かった。遺構、遺物とも検出しなかった。

Ⅶ. 出土遺物

(1) 土器

出土層位は、Ⅰb層と第Ⅱ層である。Ⅰb層からは、耕作により砕かれたと思われる細片が出土し、第Ⅱ層上部からは、まとまった状態で出土している。出土状況は、第一面のT23、T24では、ほぼ全面にわたって出土した。特にT24拡張部で検出された集石遺構の周辺に多く出土した。第二面では、北側のT18中央部から南側に6m土にわたって、トレンチ巾に出土している。第三面では、北側のT1中央部付近に6m土にわたってトレンチの西壁より出土しているし、T1との関連ははっきりしないが、T19の東端近くで少量の土器が出土している。南側のT6の中央部に、甕1個体分の出土をみた。今回の調査で住居址を検出しえなかったので、第一面、第二面、第三面での土器の出土状況を住居址との直接的関連としてはとらえられないが焼土が存在することや出土層位には炭化粒子を含むことなどから洪水などによる自然営力で集まったのではなく人工営力によるものと判断される。器形がはっきりするまで復元できた土器は少なく、破片としての出土が多かった。総量で、ダンボール1.5箱分である。土器は、精製土器と粗製土器に分けられる。器形は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、台付土器である。土器の色調は、精製土器では、燈色系と赤褐色系のものが多く、粗製土器は燈色系で磨耗しているものが多い。また、胎土に金雲母を含むもの、丹塗りの痕跡のあるもの、擦消縄文のあるものが出土している。土器の報告は、調査結果と同じく、第一面から第四面へ順に土器がまとまって出土したトレンチを中心に、器形毎に記述し、破片から器形としてはっきりとらえられなかったものは、紋様の記述にとどめた。なお、拓本した土器については、図版（8～12）と写真図版（9～12）での標示番号を一致させている。

〈第一面〉

T23、T24ともに、大形の甕形土器が目立つ。甕の内側、外側に炭化物の付着が多く、煮沸

具としての用途がうかがわれた。器形は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、台付土器が主である。

〔トレンチ23〕

○甕形土器 大形と小形があり、粗製土器が多い。口縁部は、平縁と波状縁がある。図版7-1は、赤褐色、粗製の大型甕の上部である。口縁部は、平縁で無紋で少し外反している。頸部に二本の沈線をめぐらし、その下側に二段にわたって変形工字文が施文されている。計測値は、口径28.0cm、残高12.0cmである。胎土に金雲母を含んでいる。甕の内側、外側に炭化物が付着している。図版8-1は、浅黄色の粗製の小型甕の口縁部である。口縁は波状で、少し外反しており、波状の頂点に山形突起がみられる。口縁部、頸部とも無文で体部には、細かい縄文が横走している。

○壺形土器 形のはっきりしたものは出土していない。図版8-2、3は燈色の精製壺の口縁部である。平縁で、垂直に立ち上がっており、上部に沈線をめぐらし、内側上部にも沈線がみられる。胎土に金雲母を含んでいる。

○鉢形土器 図版8-4は燈色の粗製土器の口縁部である。平縁で、口縁部直下から縄文が施文されている。図版8-5は、燈色の精製土器の口縁部である。ゆるやかな波状口縁で、上部の内側、外側に沈線をめぐらし、その下に変形工字文を配置し、工字文の内側と胴部に縄文がみられる。図版8-6は、赤褐色の精製土器であり、変形工字文の下部に沈線がめぐらされ、擦り消しがみられる。

○高台付土器 図版6-3は、赤褐色の土器である。ゆるやかな波状口縁で、五つの山形突起をもち、口縁の内側、外側に沈線をめぐらしている。胴体上部に四組の入組工字文が配置され、工字文の中に2本の沈線がみられる。胴体下部には、撚糸文が横走している。台部は無文でころもち「ハ」字状になっているようだ。計測値は、口径16.5cm、底径6.5cm、残高6.8cmであり、最大径は、口径に同じである。胎土に金雲母を含み、外側はだいぶ磨耗している。写真図版6-1は、にぶい燈色の土器の台部である。「ハ」字状に開いており、台部の裏側がいていないにつくられていることから、蓋形土器の上部のつまみの可能性もある。残高3.3cmで、無文である。図版6-4は、燈色の精製土器の台部であり、「ハ」字状に開き、部分的に撚糸文がみられる。計測値は、残高7.7cm、台部底径10.9cmである。胎土にわずかながら金雲母を含み、ちょっとすすけた部分がみられる。図版8-7は、黄燈系の高坏形土器の口縁部らしい。平縁で、上部の内側、外側に沈線をめぐらし、体部に変形工字文を配置している。工字文の中に1本の沈線がみられる。金雲母を含み、外側はだいぶ磨耗している。図版8-8~11は、燈色を呈し、同一個体と思われる。沈線がめぐらされ、沈線間に撚糸文がみられる。図版8-12~14は、燈色系の土器で、胎土に金雲母を含んでいる。図版8-15は、灰褐色の土器で、変形工字

文が施文され、擦消技法がみられる。図版8-16は、褐色の土器で、沈線による連弧文が施文され、胎土に金雲母を含んでいる。図版8-17は、灰褐色の精製土器で、太い沈線で雲形文が施文され、胎土に金雲母を含み、擦消技法がみられる。底部は、5個体出土している。文様は網代文と網代文を再調整により消しているものがみられた。

〔トレンチ24〕

数量的に最も多く出土しているが粗製土器が多い。

○甕形土器 大形の甕が多く、内側、外側への炭化物の付着が目立った。沈線による有文のものはなく、体部に縄文か燃糸文が施文されている。図版7-2は、赤褐色の大形甕で、底部を欠く。口縁部は、平縁で無文であり、少し外反している。頸部に沈線はなく、体部全面に燃糸文がみられる。計測値は、口径27.5cm、最大径28.5cm、残高20.5cmである。土器の内側、外側に炭化物の付着が多い。図版9-18は、燈色系の土器の口縁部である。波状口縁で、外反しており頂点に山形突起をもち、口唇部に浅い沈線が施文されている。口縁部は無文である。頸部には沈線がみられる。図版9-19は、燈色の土器で、体部に結節縄文をもつのである。図版9-20は、赤褐色の精製土器の体部で燃糸文が施文され、胎土に金雲母を含んでいる。

○壺形土器 図版6-5は、赤褐色の小形の精製土器で、上半身のみ残っていた。波状口縁で外反しており、口縁部の内側、外側の上部に沈線をめぐらし、肩部及び体部の最大径部にも二本の沈線をめぐらしている。体部には、沈線により、チョウの羽形が三個配置され、羽形の内部は、燃糸文が施文されている。計測値は、口径7.1cm、最大径20.5cm、残高7.3cmである。胎土に金雲母を含み、擦消技法がみられる。図版9-21は、赤褐色を呈する粗製の壺で、口唇部が外側へ折るかえされ、ちょっと厚くなっている。口縁部の外側は無文であり、内側に沈線が一本めぐっている。頸部には、部分的に雑に施文された沈線がみられ、体部全面に燃糸文施文されている。図版9-22、23は、口縁部が垂直に立ち上がっている壺の肩部であり、燈色を呈している。肩部に二本の沈線と刻目をもつ突帯を波状にめぐらし、突帯には、3cm±間隔に山形の刻みを入れている。

○台付土器 灰褐色の台のない土器が出土している。内側は黒色で、体部の下方には燃糸文がみられ、胎土に金雲母を含む。

図版9-24~27は、燈色系の土器で、沈線に沿って、縄文部に刺突の列点がみられる。24、26、27には金雲母に含まれている。図版9-28は、灰褐色の土器の口縁部であり、平縁で口唇部を外側へ折るかえして厚くし、その上に、深い沈線をめぐらしている。口縁上部に三本の沈線がめぐっている。図版9-29、図版10-30~33は、沈線部や縄文部に、丹塗りの痕跡をもつ土器である。胎土に金雲母を含んでいる。

図版10-34は、燈色の精製土器である。小形筒形土器の口縁部である。口縁に三本の沈線を

めぐらせ、その下側に波状文を施文している。底部は、6個体分の出土をみた。文様は、木葉文1、網代文2、網代文を篋で再調整したもの1である。再調整した底は、少しあげ底になり、凹状を呈している。(図版10-35、36)

図版10-37は、燈色の土器で、沈線に沿って三角形が刺突されている。文様から他の土器と異なった系統と考えられる。

〈第二面〉

この面では、T18の中央部から南側寄りにまとまって出土している。他のトレンチでは、T27をのぞき文様のあるものは出土していない。大形の土器は、あまりみられない。器形は、甕形土器、壺形土器、高坏形土器が主である。

〔トレンチ18〕

○甕形土器 図版7-11は、燈色の小形の粗製土器である。胴体上部から上を欠いている。体部に捺糸文がみられ、底部は、網代文である。計測値は、底径6.7cm、残高8.3cmである。胎土にわずかながら金雲母を含んでいる。土器の内側、外側が少しすすけている。図版10-38は、灰褐色の土器で、胎土に金雲母を含んでいる。

○壺形土器 精製土器が目立った。図版10-39、40は、赤褐色の精製土器の波状口縁部である。少し外反しており、内側、外側の上部に沈線をめぐらしている。強く張った肩部にも三、四本の沈線がみられる。胎土に金雲母を含んでいる。図版10-41、42は、赤褐色の精製の壺の肩部とみられ、沈線の下側に捺糸文を施文している。図版11-43は、燈色の土器で、頸部に沈線をめぐらせ、肩部から縄文がみられる。胎土に金雲母を含んでいる。

○高坏形土器 図版6-2は、口縁部、脚部を欠く燈色の高坏形土器である。残存部分の文様をみると、沈線の下に一重に連弧文を配置し、その下側に、部分的に条痕状のごく浅い沈線がみられる。条痕は、縄文かもしれない。外側はだいぶ磨耗している。計測値は、底径8.8cm、残高3.3cmである。胎土に金雲母を含んでいる。写真図版7-12は、燈色の精製土器で、坏の底部の一部から脚部にかけてである。脚部は、「ハ」字状に開いており、捺糸が不整方向に施文されている。計測値は、脚部底径8.2cm、残高5.3cmである。胎土に金雲母を含んでいる。

図版1-44~47、図版11-48~53は、赤褐色の精製土器であり、高坏形土器か鉢形土器である。沈線による有文と、捺糸文が施文されている。胎土に金雲母を含み、擦消技法がみられる。図版11-54、55は、精製の鉢形土器の口縁部である。23は、すすけて黒色を呈している波状口縁であり、24は、燈色の平縁である。ともに胎土に金雲母を含んでいる。図版11-56は、灰褐色の精製土器であり、擦消技法がみられる。

底部は、図版12-58、59の2個体分である。26は甕形土器の項でふれたものの底部であり、27は、網代文のあと、篋で調整され、中央部が凹状になっている。胎土に金雲母を含んでいる。

〔トレンチ27〕

図版10—57は、燈色の精製の高坏形土器である。波状口縁に山形突起をもち、口唇部に浅い沈線がみられ、さらに口縁部の内側、外側に沈線をめぐらし、体部に變形工字文が配置されている。工字文の中に、沈線が1本みられる。胎土に金雲母を含んでいる。

〈第三面〉

この面では、北部のT1、T19、南部のT6から出土しているが、中央部の畑地からの出土はみられなかった。器形は、甕形土器、鉢形土器、台付土器が主である。

〔トレンチ1〕

○甕形土器 明褐色の粗製土器であり、口縁部と底部を欠いている。体部には、細かい撚糸文が不整方向に施文されている。計測値は、残高9.5cmである。内側面に炭化物が付着していた。

○鉢形土器 図版6—6は、赤褐色の粗製土器であり、口縁部を欠いている。体部全面に、撚糸文を横走させており、底部は網代文である。計測値は、底径7.2cm、残高9.2cmである。胎土に金雲母を含んでいる。

○台付土器 図版6—1は、燈色の精製土器である。平縁であり、口縁部に粗雑な浅い沈線をめぐらし、体部に撚糸文を不整方向に施文している。台部の文様はみられないが、みがかれている。台部の内側は、つくり方がていねいではない。計測値は、底径4.5cm、残高5.8cmである。この土器は、外側の勾配が少し急ではあるが、口縁部のこわれ方や口径部への炭化物の付着状況から、蓋形土器ともみれる。

図版12—60は、燈色系の土器の平縁の口縁部である。口縁の内側に二本、外側に三本の沈線を施文し、外側の沈線の間 triangular 刺突文を連続させ、さらに、變形工字文も配置されている胎土に金雲母を含んでいる。^(注2) 図版12—61は、赤褐色の精製土器で、浅い沈線による變形工字文が施文されている。胎土に金雲母を含み、擦消技法がみられる。図版12—62、63は、赤褐色の土器で、浅い沈線に沿って、篋による刺突文が施文されている。胎土に金雲母を含んでいる。図版12—64は、うすい燈色系の粗製壺の口縁部である。口唇部を外側へ折返し、沈線を施文している。口縁部は無文で垂直に立ち上がっており、頸部に粗雑な沈線をめぐらせ、体部には縄文を施文している。

〔トレンチ19〕

褐色系の鉢形土器の口縁部が出土している。平縁で、内側、外側とも口縁部に炭化物の付着がみられた。無文である。

〔トレンチ6〕

写真図版7—15は、赤褐色の粗製の甕である。平縁で、少し外反している口縁部は、短かく無文である。体部には、撚糸文が不整方向に施文されている。計測値は、残高16.0cmである。

土器の内側、外側に少し炭化物の付着がみられた。

(2) 石 器

石器は、剥片も含めて、土器とともに第Ⅱ層から出土しているものが大部分である。剥片が多く出土し、完形の石器は少ない。打製石器が大部分である。

〈石鏃〉 有柄式の石鏃が1個だけ出土している。石質はフリント（燧石）で赤色に近い。一部分に、礫面を残して作っている。計測値は長さ3.2cm、巾1.1cm、厚さ0.4cm、重量0.2gである。

〈石匙〉 小形の縦型石匙が1個出土している。石質は、輝緑凝灰岩で、あずき色をしている。両面から打撃を加えているが、ていねいな作り方とはいえない。計測値は、長さ4.1cm、巾2.1cm、厚さ0.7cm、重量0.5gである。

〈凹石〉 石質は、花崗閃緑岩で、かなり風化している。片面に浅いくぼみがあり、先端部が僅か平になっている。計測値は、長さ10.9cm、巾6.3cm、厚さ3.3cm、重量370gである。

〈打製石器〉 これらの石器は、暗灰色の粘板岩を利用し、刃部をかなり大まかに作っている。用途は、斧や槌と思われる。計測値は、長さ10.7cm、巾6.2cm、厚さ1.9cm、重量120gと長さ11.8cm、巾8.1cm、厚さ3.0cm、重量310gである。

〈籠状石器〉 石質は凝灰質硬質泥岩であり、主要剥離面を残している。刃部の調整は、それほど細かになされていない。この出土層は、第Ⅰ層の下層であることから流れ込みとも考えられる。計測値は、長さ9.2cm、巾4.1cm、厚さ2.3cm、重量90gである。

(3) その他

〈堅果類〉 T24のQ1の土器包含層から、炭化したクルミが1個出土している。（写真図版8-7）

〈鉞物〉 T23から、雲母鉄鉞が3個（160g）が出土している。これは、赤色顔料の原料として使用されたと考えられるし、土器、その他の器具の彩色に用いられたのかもしれない。原産地は、県内では和賀仙人である。（写真図版8-8）
(注3)

VIII. ま と め

沼の上遺跡は、昭和45年の調査により、弥生時代初期の良好な遺跡として注目されてきたが今回の調査により、かなり広範囲にわたって、遺構、遺物の分布を確認でき、良好な遺跡として再認識させられた。

今回の調査における、層位をみると、第Ⅲ層（砂層）、第Ⅵ層（砂礫層）がかなり厚く堆積していることがわかった。このことは、沼の上地域に、北上川の川原時代があったことをおしえていていると思う。砂層の厚い部分では、少し黒ずんだ細い帯状の層により三層ほどに細分されることを確認したが、この細い帯状の層が砂の堆積の上下の時間的な違いを示していると考えられる。また、第二面南部トレンチで確認された砂礫層の隆起は、かつての北上川の自然堤防の名残りといえる。沼の上遺跡は、第Ⅲ層（砂層）の上部、第Ⅱ層（シルト層）上面に生活の基盤をすえていたことが今回確認された。

調査により、検出された遺構は、溝状遺構10条、焼土部分2ヶ所、集石遺構3ヶ所、第Ⅱ層への落ち込み部2ヶ所である。これらの遺構の検出面は、ほとんどが第Ⅱ層上部である。また、遺物がまとまって出土したのは、最高位の第一面では、全面にわたっていたし、第二面、第三面では、北部側のトレンチであった。しかしながら確認された遺構、遺物に伴うとみられる住居址遺構は検出しえなかった。

出土した土器の器形及び紋様形態は、各面に共通していると思われる。器形は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器、台付土器が主であり、地文に撚糸文や縄文を施文している。口縁部には平縁と波状口縁とがあり、波状口縁では頂部に山形突起をもつものもみられた。有文土器には、沈線により変形工字文や波状文を主体とする紋様が施文され口縁部の内側にも沈線がめぐらされている。色調は、燈色系から赤褐色系であり、精製土器の胎土には金雲母を含むものが多く、擦消縄文の技法も目立った。縄文部や沈線部に丹塗りの痕跡をもつ土器もわずかながら出土している。

器形及び紋様形態から、中村五郎は、宮城県の山王遺跡第Ⅲ層から出土する器形の系列に、岩手県谷起島遺跡出土土器に続いて、当沼の上遺跡出土土器をあげているし、伊藤鉄夫は、弥生式文化初頭の大泉式を三期に分けた場合の中期にあたるのではないかとしている。今回出土した土器について具体的な考察にいたっていないが、蓋型土器や筒形土器に類似するとみられる土器が出土していることからみて弥生式時代初期の遺跡として位置づけられるのではなからうか。

弥生時代は、稲作が始まっている時代である。当遺跡に住んだ人々が、稲作をしたといえる

確たる痕跡を示す遺構、遺物は何も検出されなかった。粃痕をもつ土器、焼米、石包丁等は出土しなかった。ごく最近、岩手県胆沢村南都田から石包丁が2ヶ出土し、岩手県南部における弥生時代の稲作の存在を示してくれた。沼の上遺跡での今後の調査に期待したい。

今回の調査は、遺跡の確認調査として107,900㎡土に2,000㎡土の試掘溝をあけて調査した。その結果として、かなり広範囲に遺構、遺物の存在を確認できたことは、その意味での目的を達したものと判断している。

今回の発掘調査にあたって、江刺市教育委員会をはじめ、江刺土地改良事業所及び、江刺土地改良区の御協力のもとに、土地所有者の皆様の御理解を得て無事終わることができました事を心から感謝致します。特にプレハブ作業所の場所として庭を心よく提供して下さい、家族ともども協力して下さった高野松雄氏の御好意と愛宕地区敬老会の方々をはじめ、協力員として参加して下さった方々に厚く御礼申し上げます。

なお、報告書作成にあたり、石質の分析は、岩手県立博物館建設事務所の佐藤二郎氏にやっていただいた。また、一の関市谷起島遺跡を担当された岩手県立博物館建設事務所の小田野哲憲氏をはじめ、岩手県埋蔵文化財センター調査員各氏の助言をいただくとともに、センター内協力員の協力を得た。こころから感謝致します。(文責 山口了紀)

註1 小田野哲憲氏の教示による

註2 註1に同じ

註3 季刊「どるめん」創刊号 1973・9

註4 「谷起島遺跡第一次発掘調査報告書」一関市教育委員会 1977

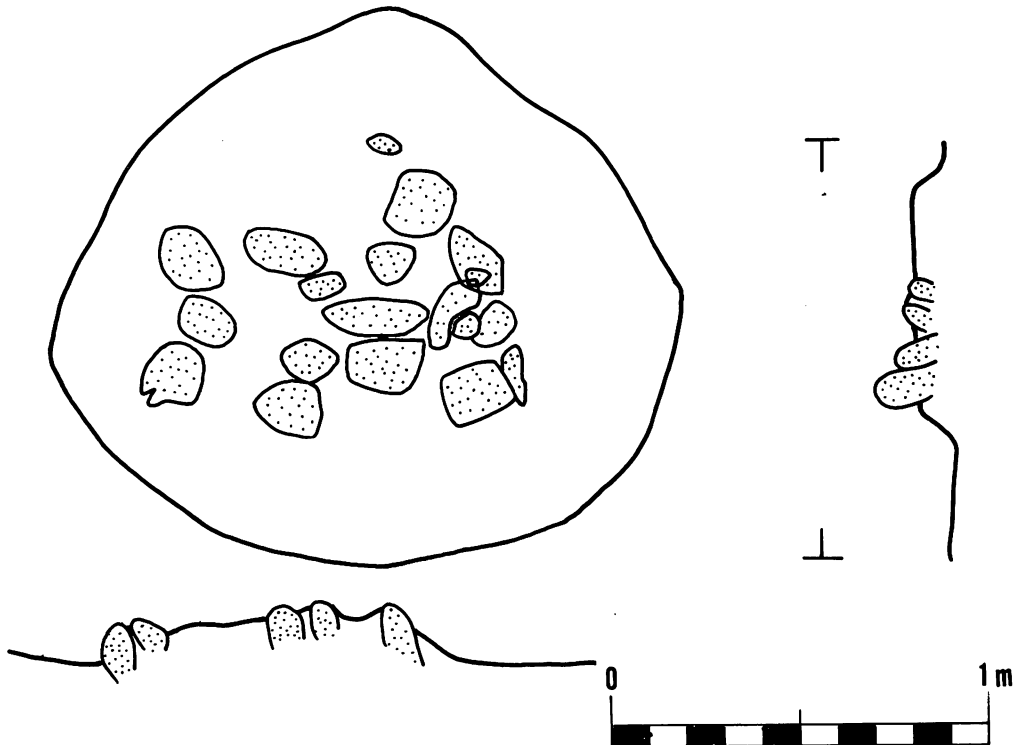
註5 中村五郎「東北地方南部の弥生式土器編年」東北考古学の諸問題

東北考古学会 1976

註6 「沼ノ上遺跡調査報告書」江刺市教育委員会 1973

参 考 文 献

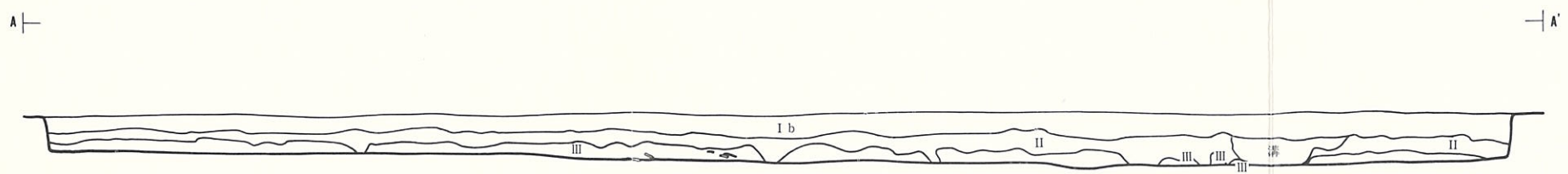
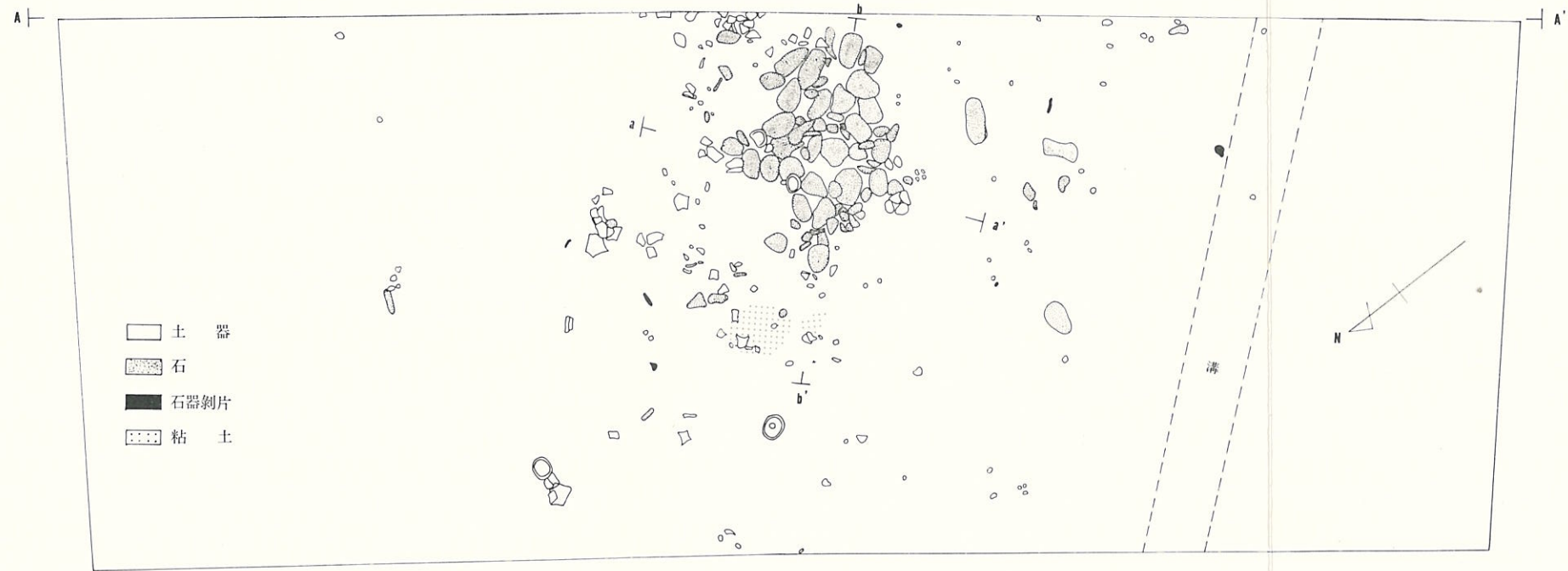
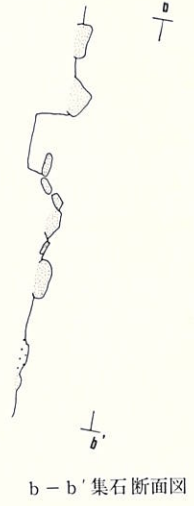
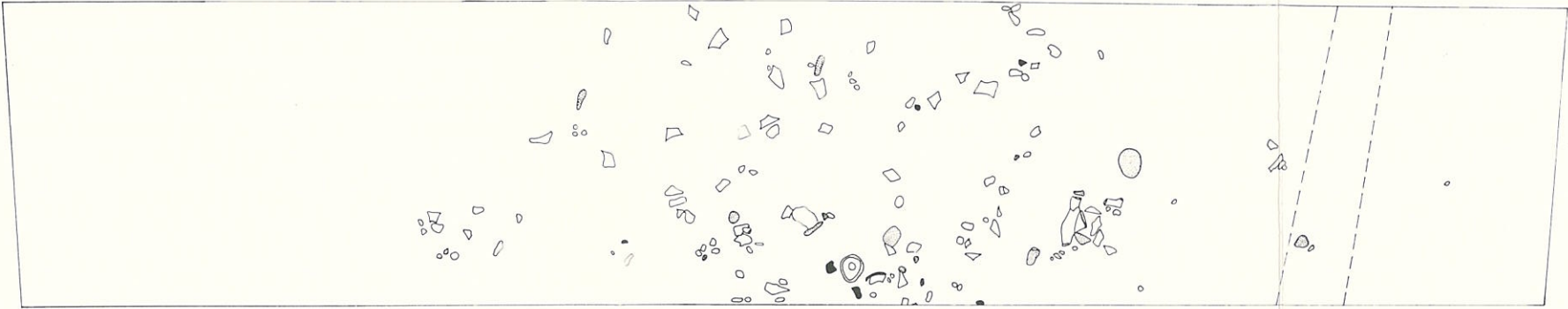
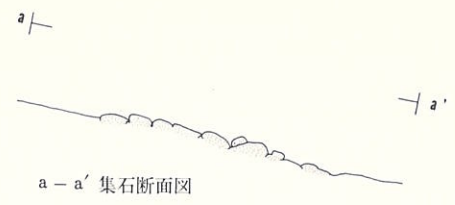
- 伊藤鉄夫 「沼ノ上遺跡調査報告書」 江刺市教育委員会 1973年
- 林 謙作 「谷起島遺跡第一次発掘調査報告書」 一関市教育委員会 1977年
- 小田野哲憲
- 岩手県 「岩手県史」第一巻、上古篇、上代篇 1961年
- 水沢市史編纂委員会 「水沢市史1 原始—古代」 水沢市史刊行会 1974年
- 小林行雄 「弥生式土器集成」 東京堂出版
- 杉原荘介
- 林 謙作 「柃形罌式土器の蓋と田舎館式土器の蓋」 物質文化7 1966年
- 中村五郎 「東北地方南部の弥生式土器編年」 東北考古学の諸問題 東北考古学会 1976年
- 志間泰治 「鱸沼遺跡」 東北電力株式会社 宮城支店 1971年
- 藤田 敬他 「縄文早期人の世界」 栃原岩陰遺跡をめぐって 季刊どるめん創刊号 1973・9



図版14 トレンチ16 集石遺構平面図



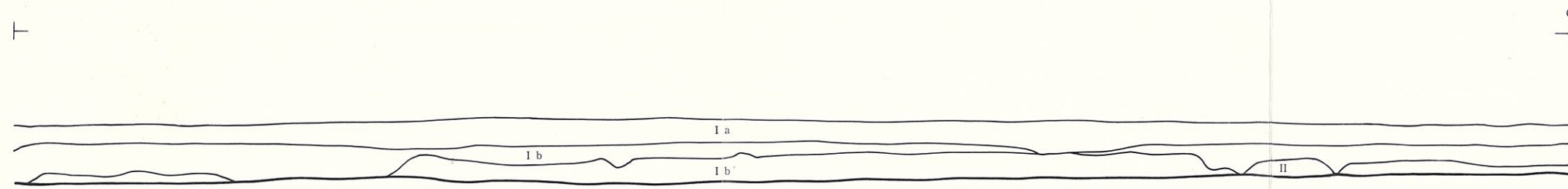
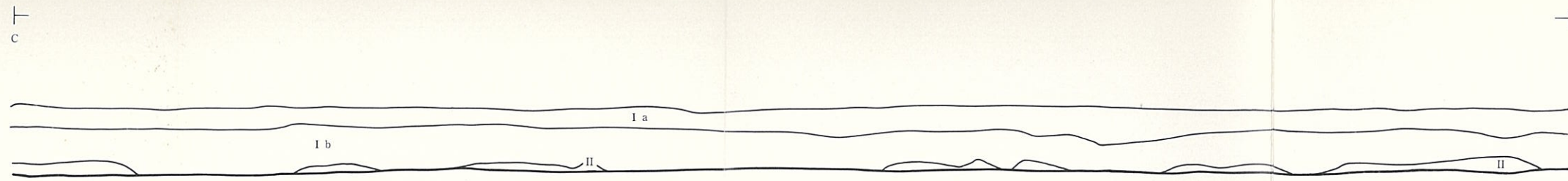
図版3 沼の上遺跡地形図・トレンチ配置図



- I b 表土 (水田耕作上下層)
- II 暗褐色土層
- III 暗褐色粘土層 (遺物包層)

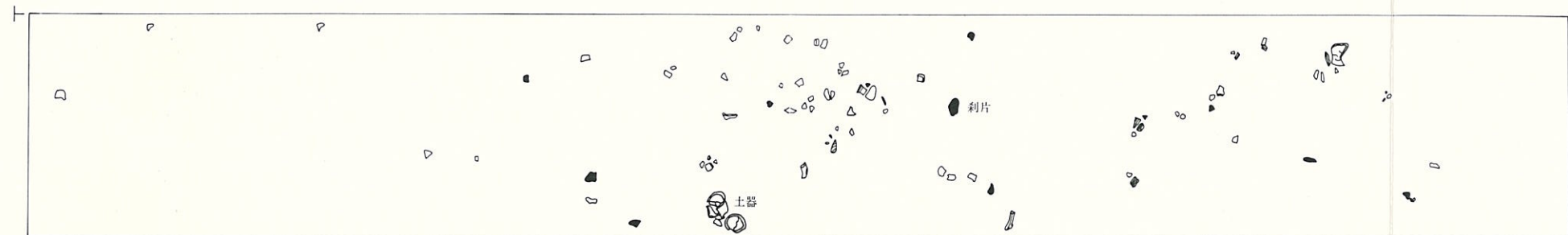
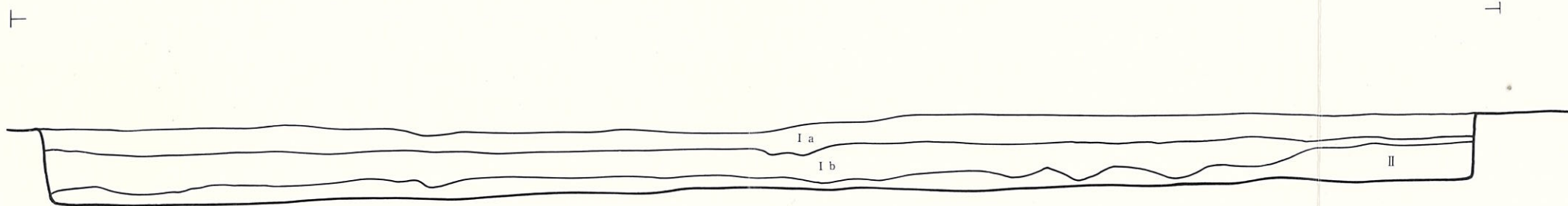


図版4 トレンテ24実側図



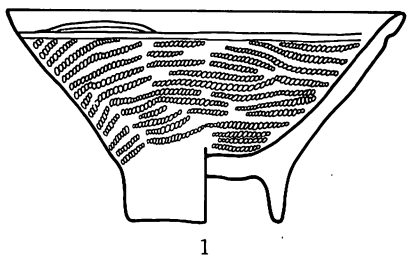
- I a 耕作土
- I b 耕作土(黒褐色土)
- I b' 耕作土(土器包含層)
- II 暗褐色粘土(土器包含層)

トレンチ I 断面図

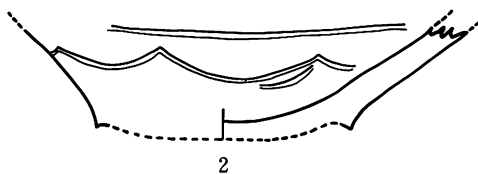


- I a 耕作土
- I b 耕作土(黒褐色土)
- II 暗褐色粘土(遺物包含層)

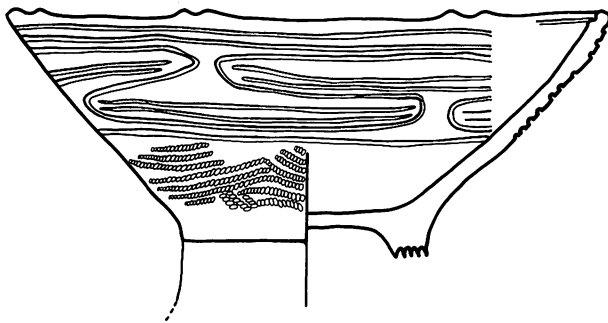
トレンチ18実測図・断面図



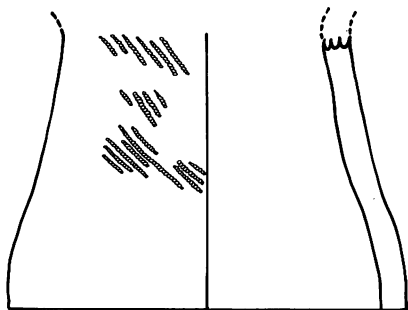
1



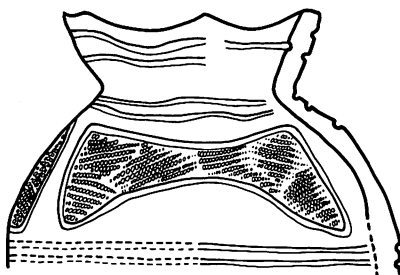
2



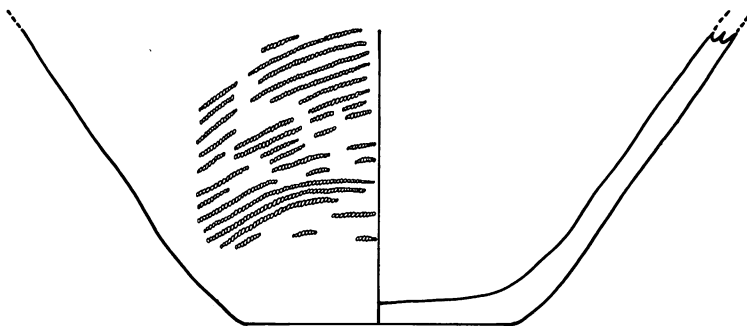
3



4



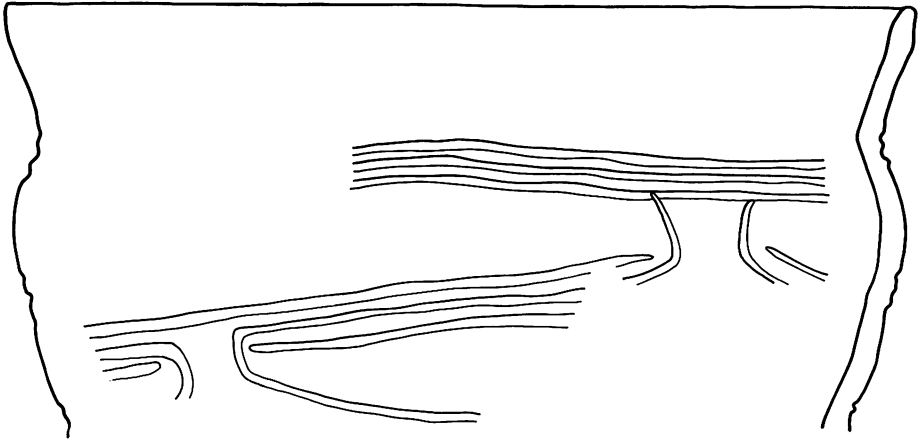
5



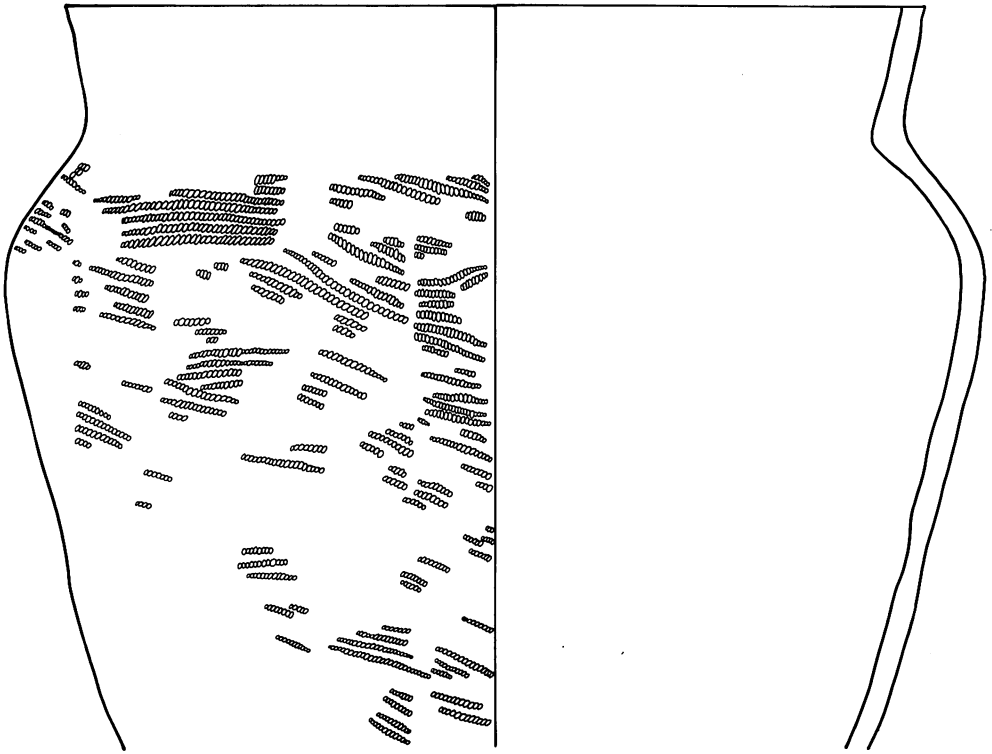
6



图版 6 土器实测图



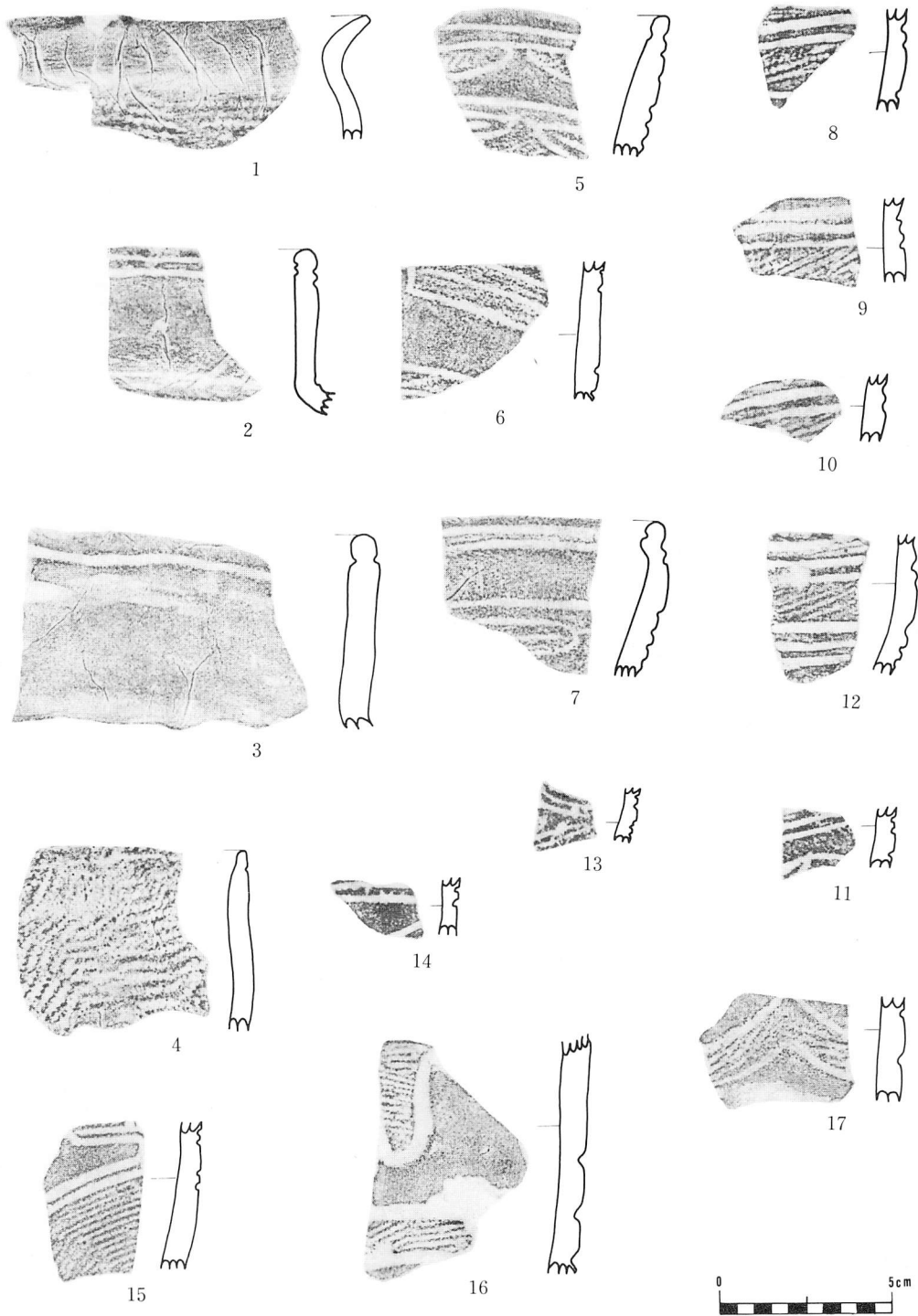
1



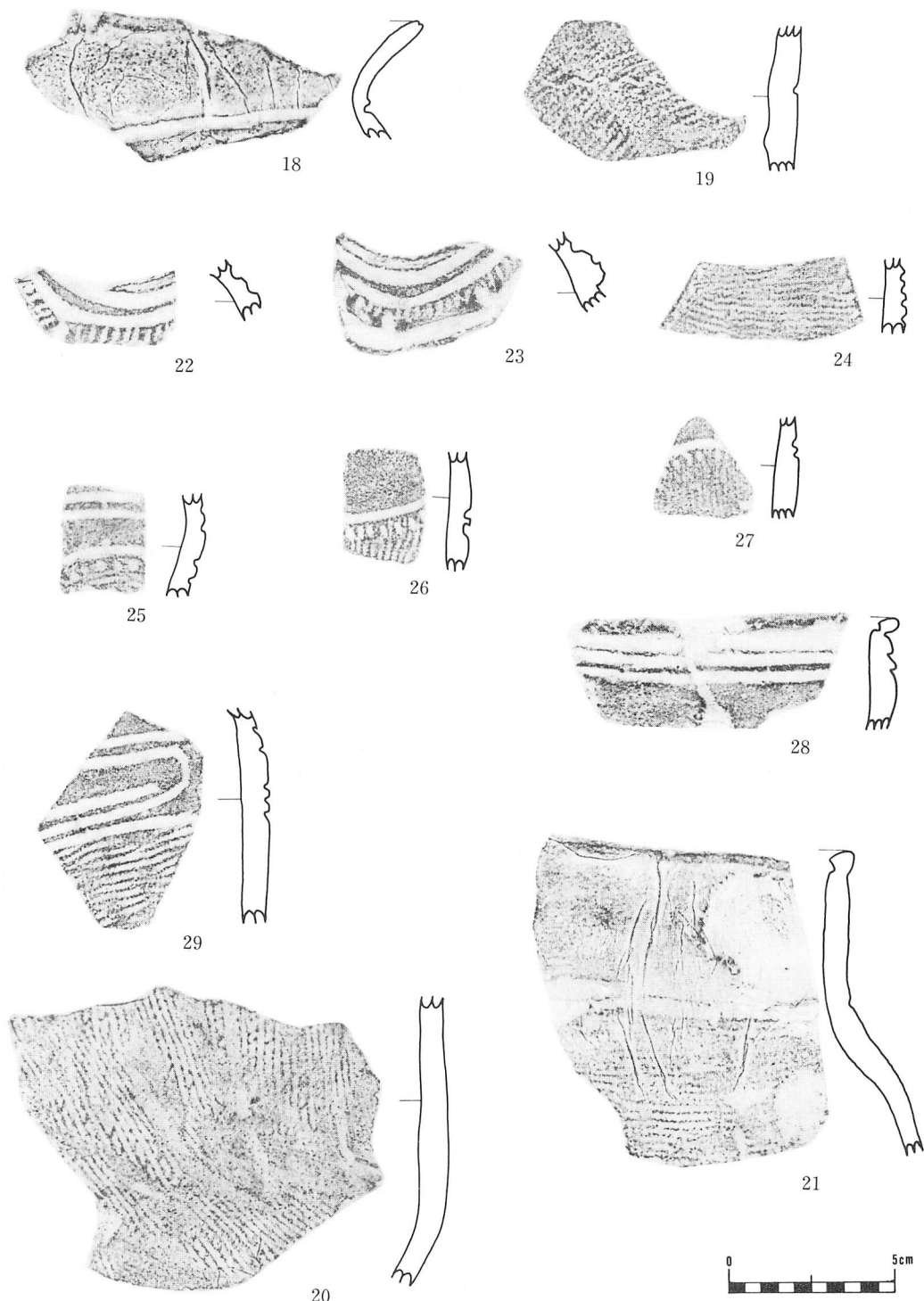
2



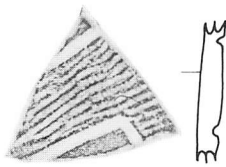
图版 7 土器实测图



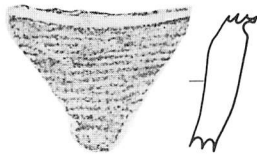
図版 8 トレンチ23出土土器拓影



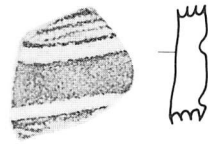
図版 9 トレンチ24出土土器拓影



30



31



32



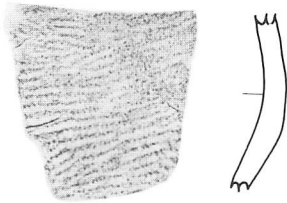
33



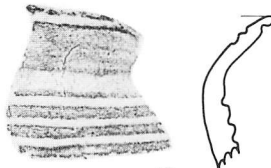
34



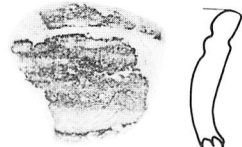
37



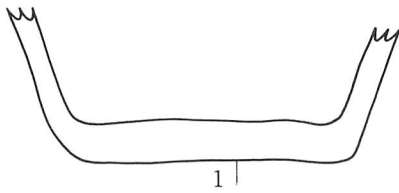
38



39



40



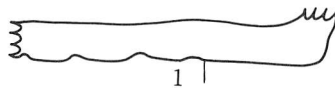
1



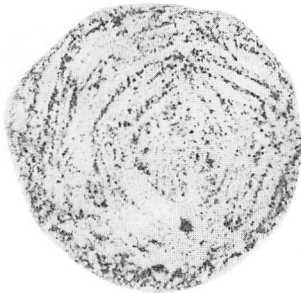
41



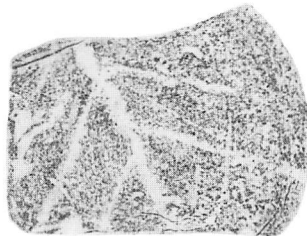
42



1



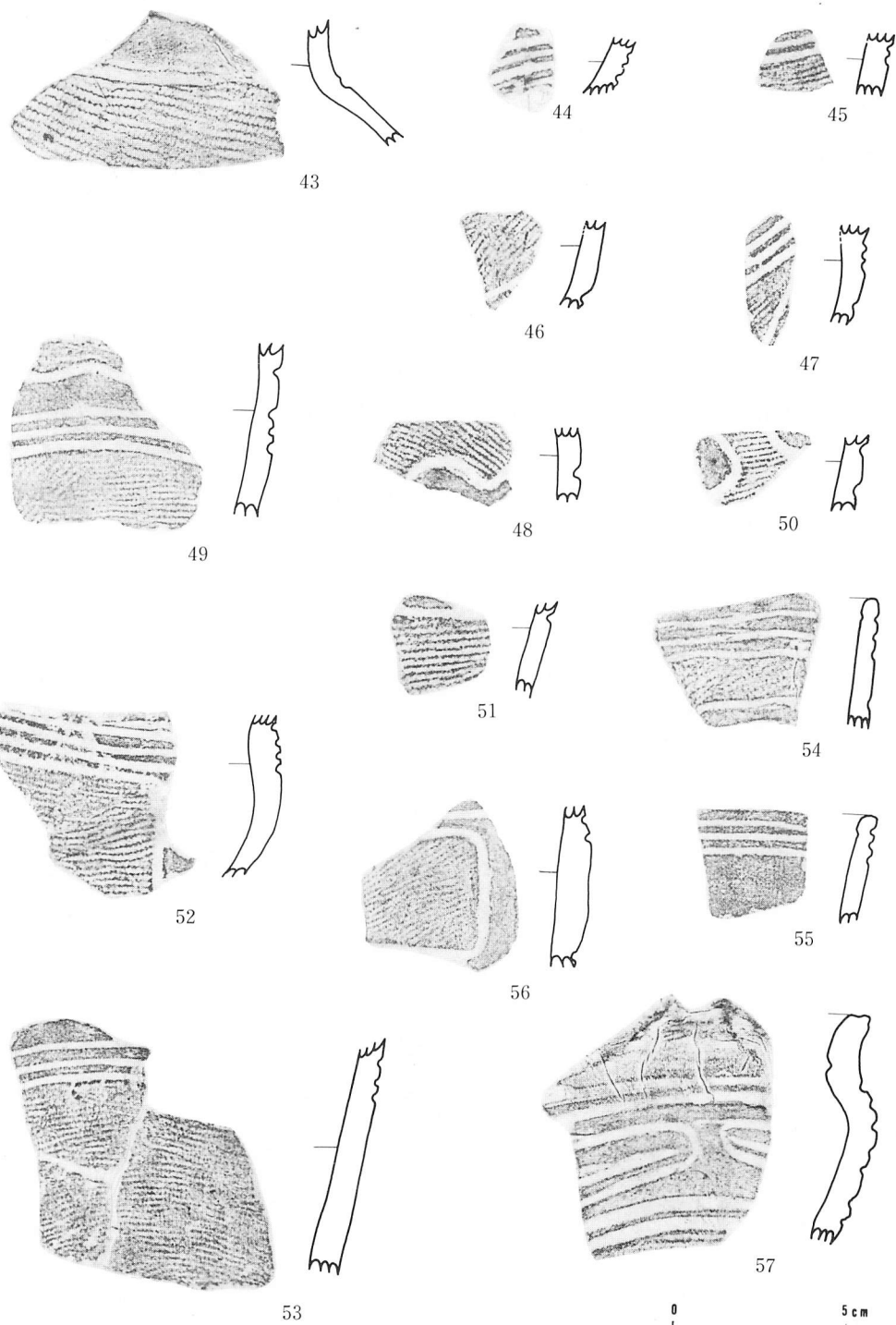
36



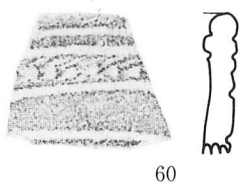
35



図版10 トレンチ24・18出土土器拓影
(30~17) (38~42)



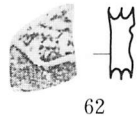
図版11 トレンチ18・27出土土器拓影
(43~56) (59)



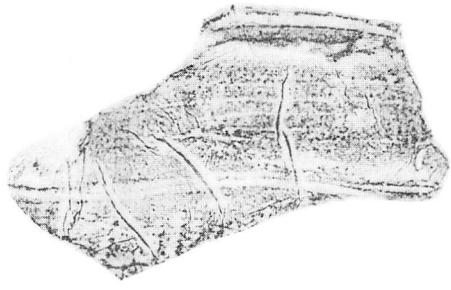
60



61



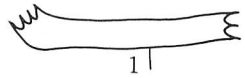
62



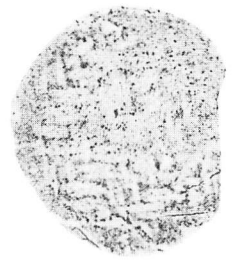
64



63



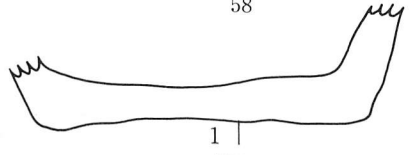
1



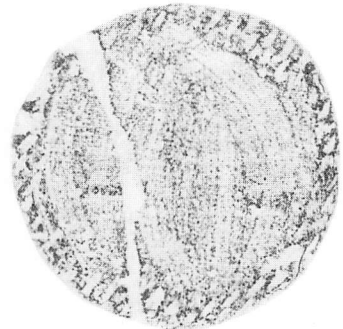
58



65



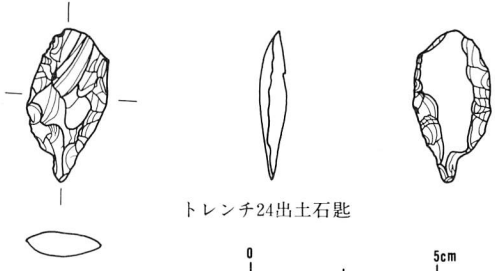
1



59



トレンチ24出土石鏃



トレンチ24出土石匙

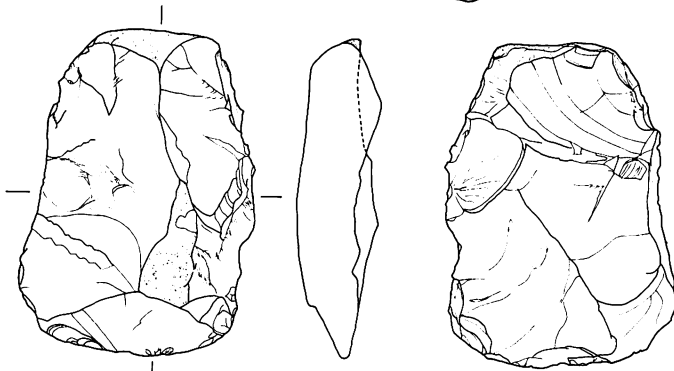


図版12 トレンチ1・18出土土器拓影 (60~65) (57~58)

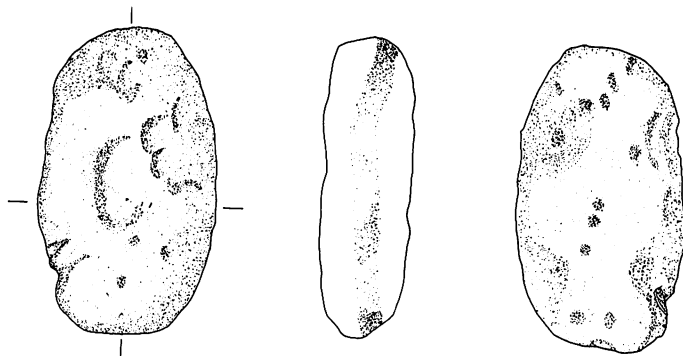


トレンチ6出土

トレンチ24出土



トレンチ24出土



トレンチ23出土



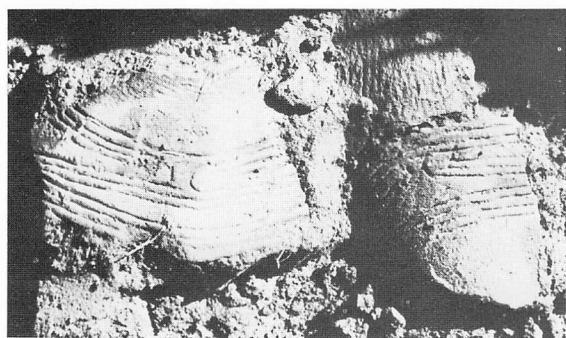
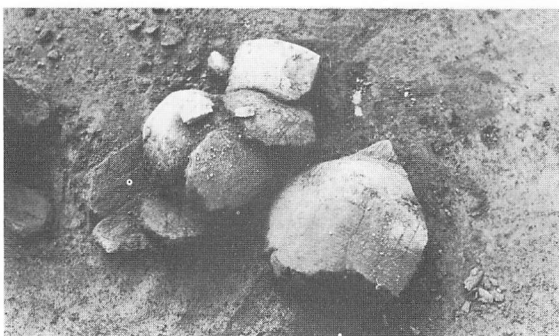
図版13 打製石器・凹石



T24拡張部全景

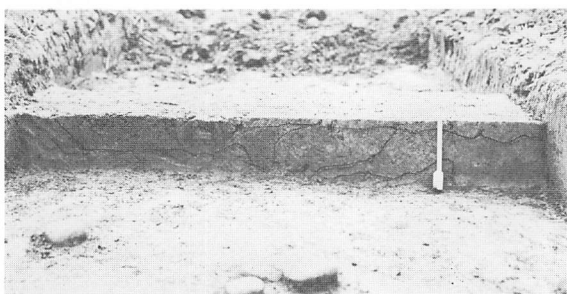


T24土器出土状況

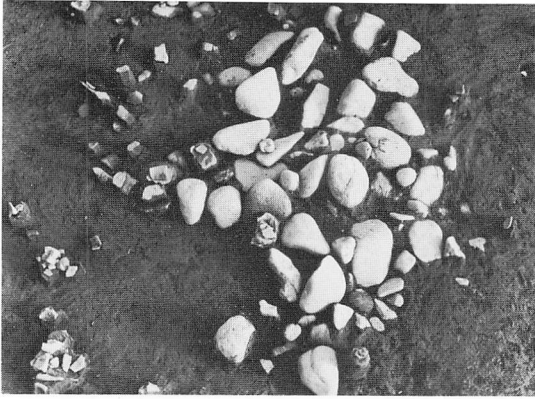


T23土器出土状況

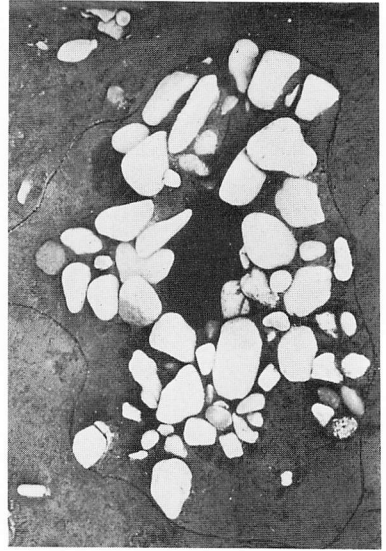
T23焼土検出断面図



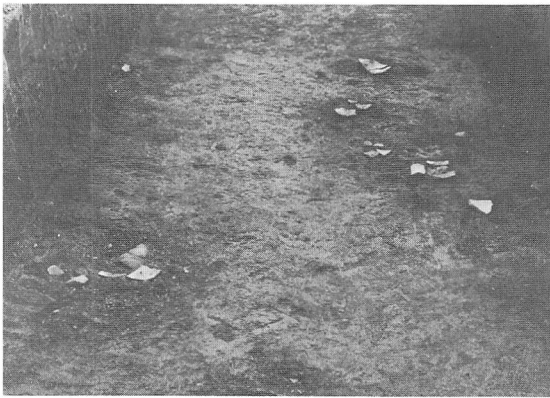
写真図版 1



トレンチ24集石遺構



トレンチ24集石遺構



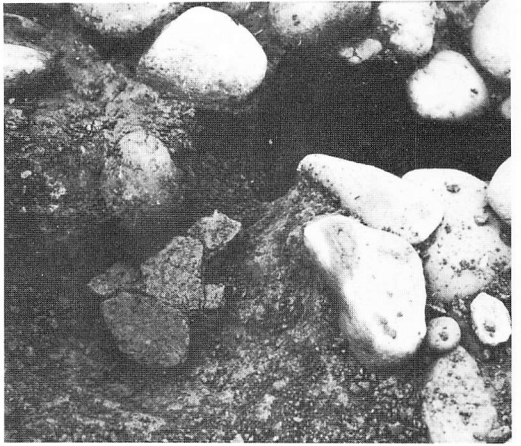
トレンチ18土器出土状況

トレンチ18土器出土状況



写真図版 2

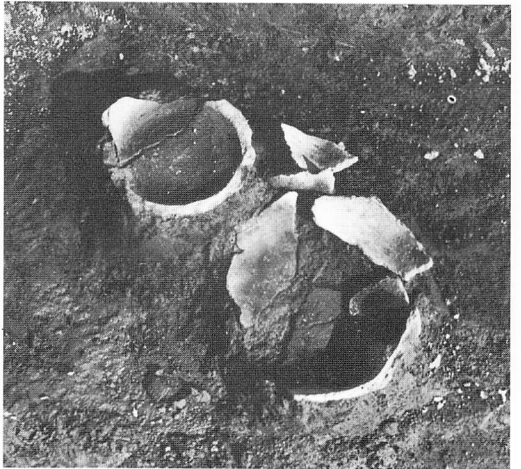
トレンチ24土器出土状況



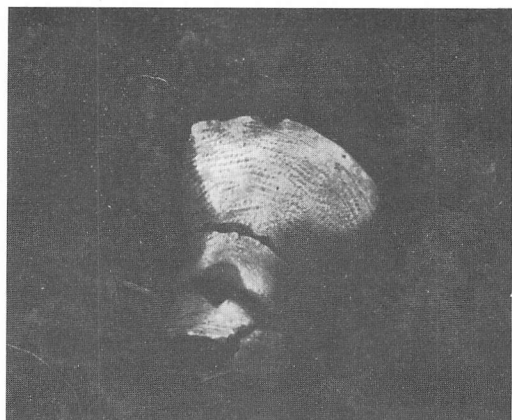
トレンチ18土器出土状況



トレンチ18土器出土状況



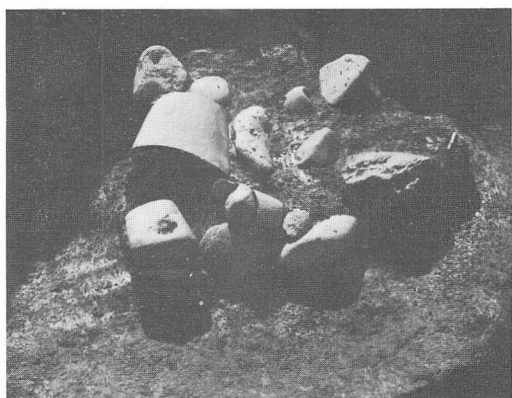
写真図版 3



トレンチ1 土器出土状況



トレンチ18断面図

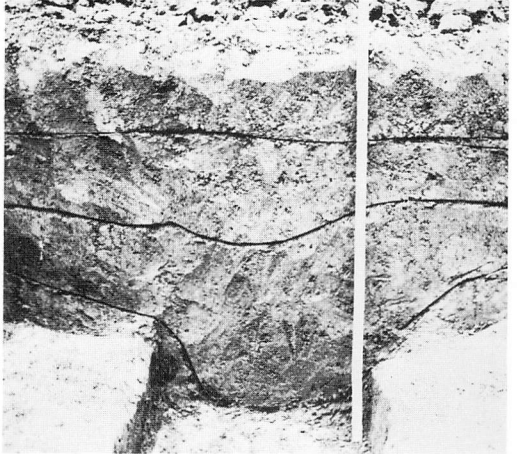


トレンチ16集石遺構

写真図版 4



トレンチ27落ち込み部断面

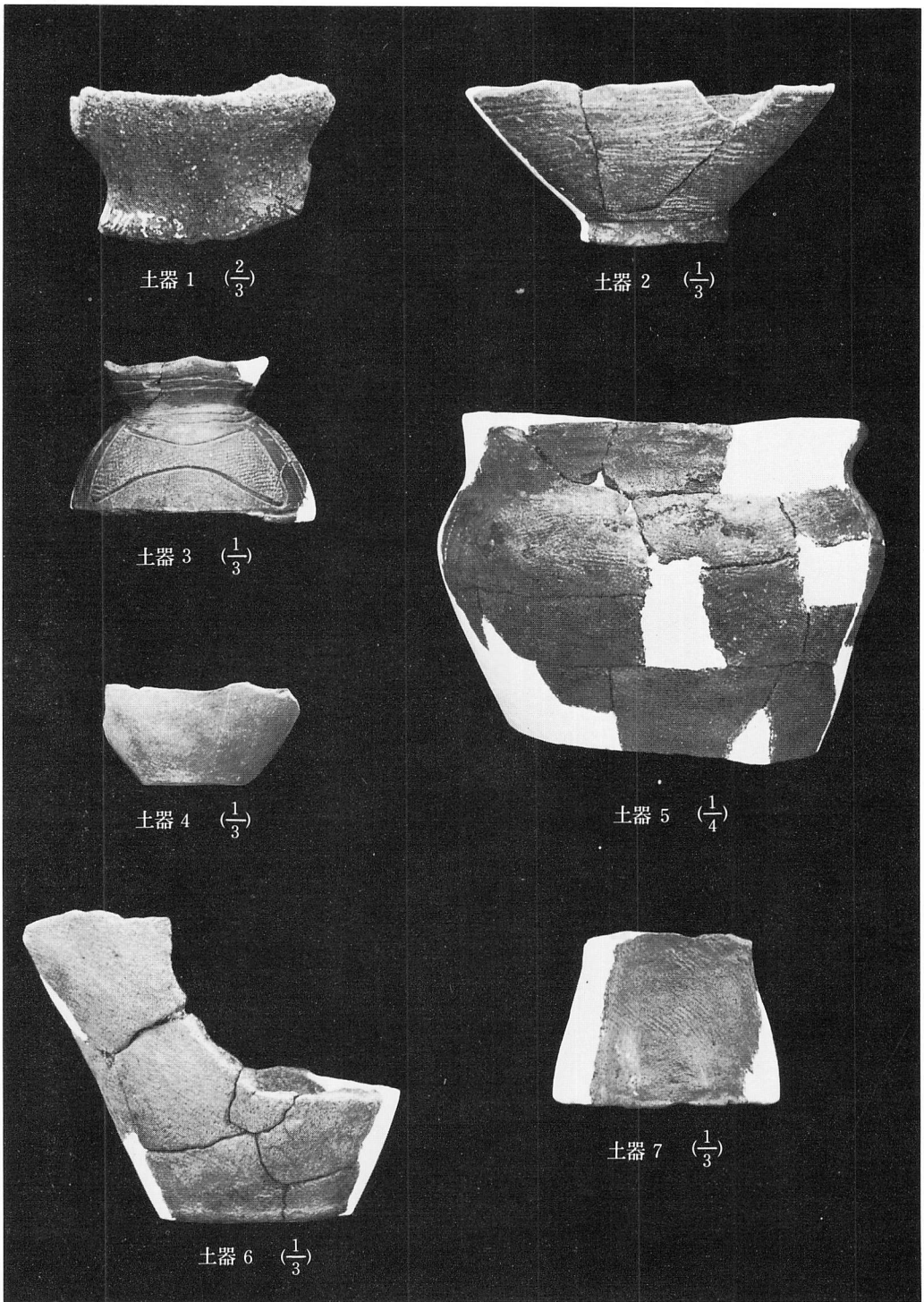


トレンチ28溝断面

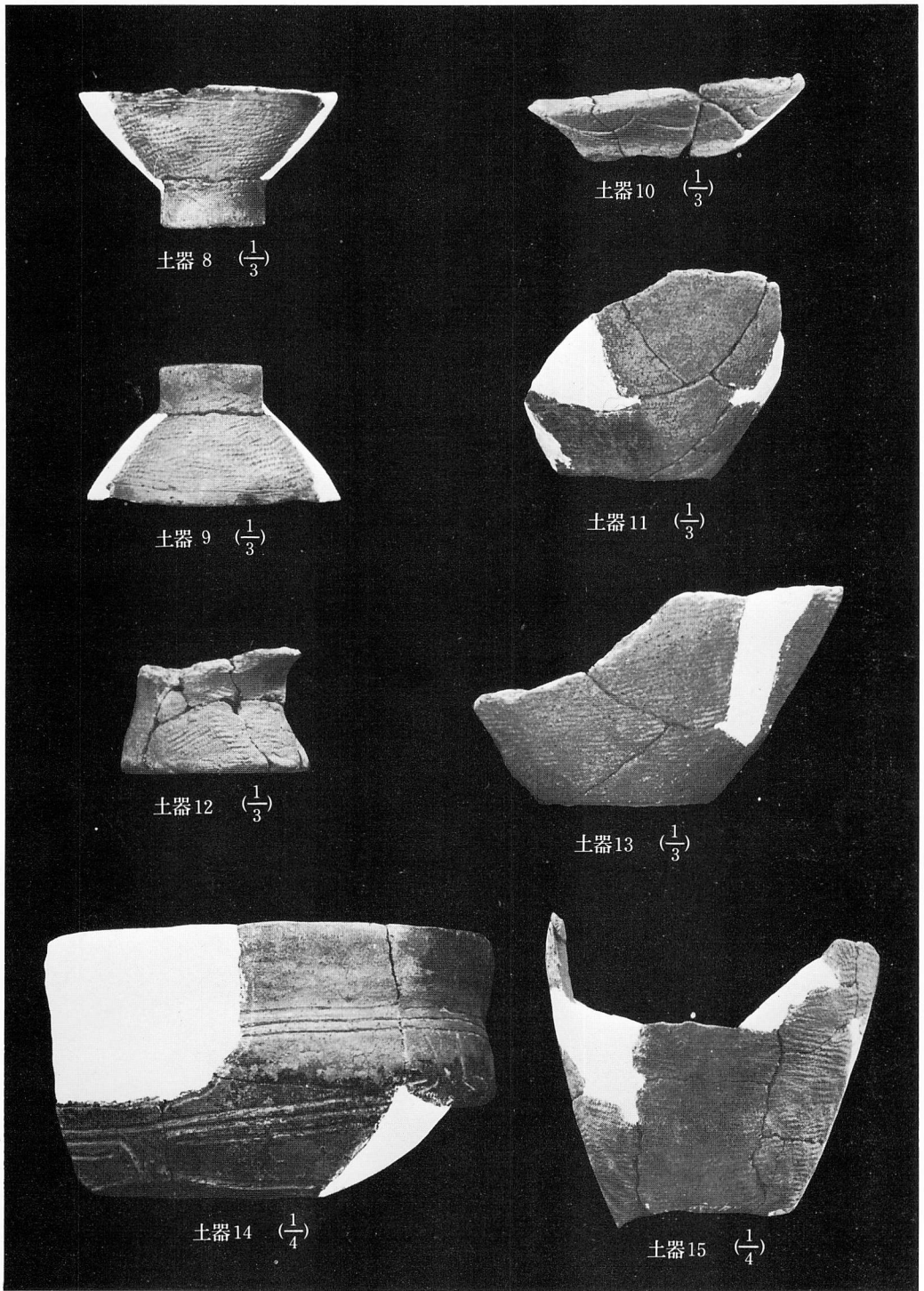


トレンチ27炭化材

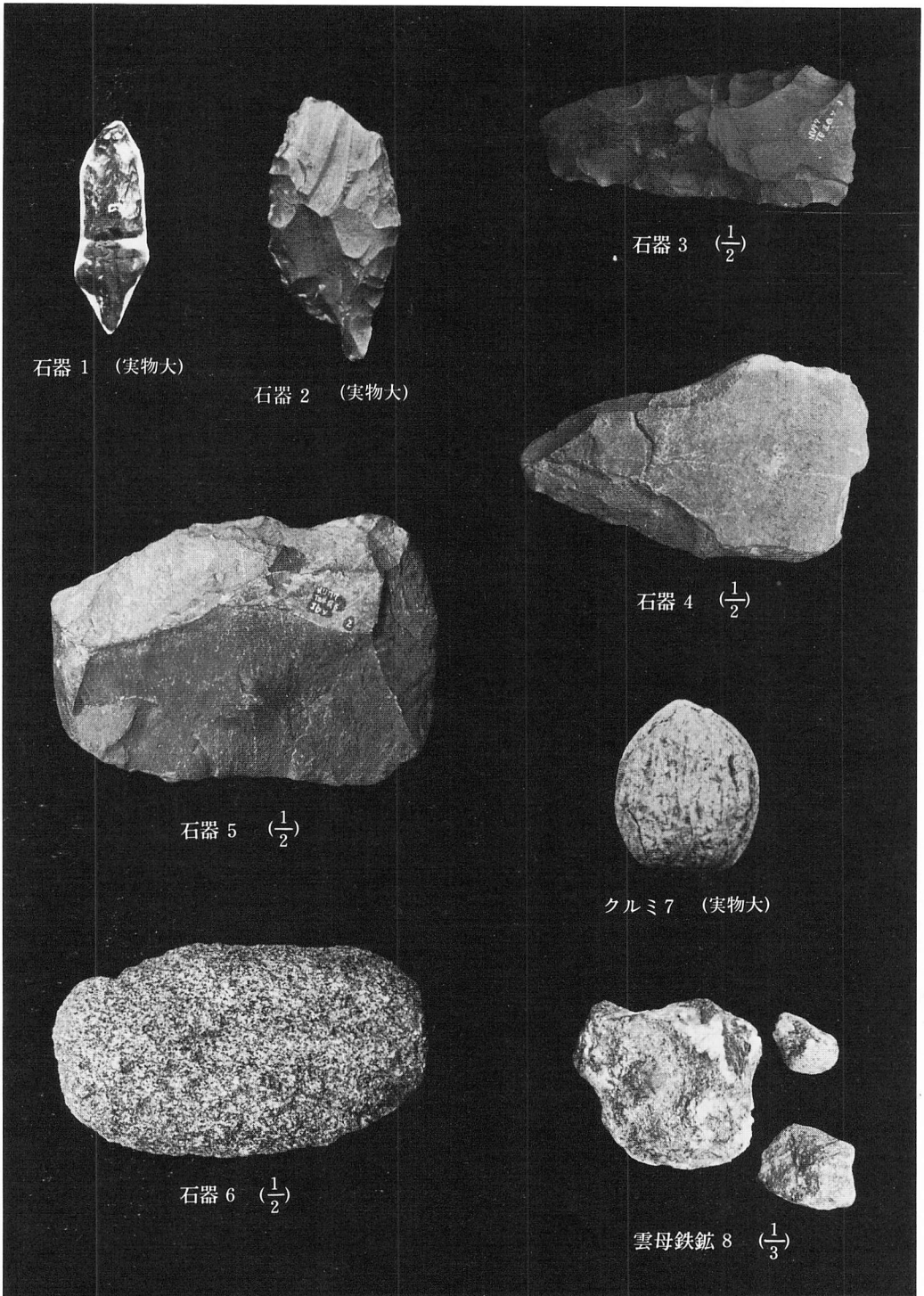
写真図版 5



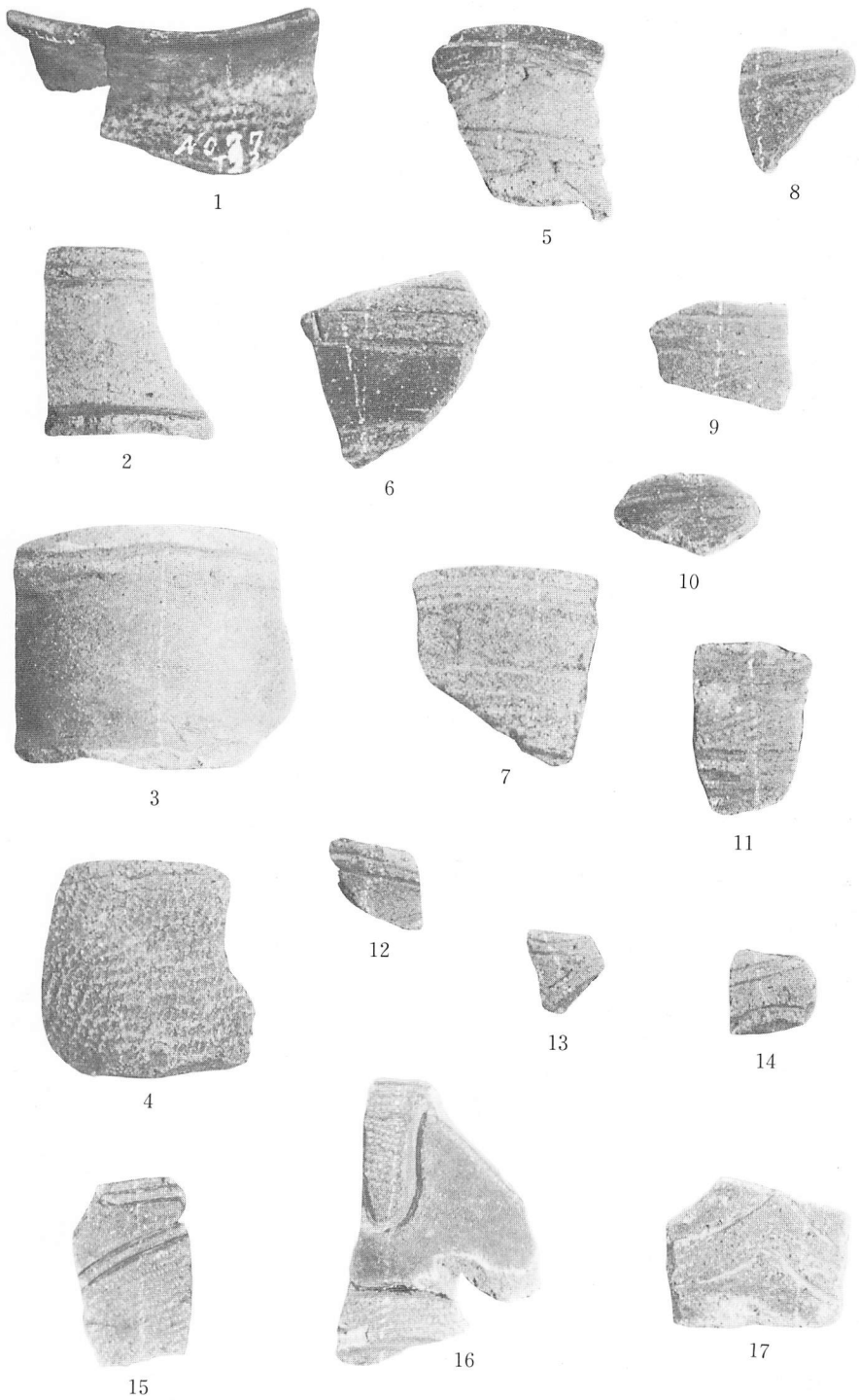
写真図版 6 沼の上出土土器



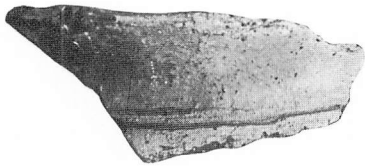
写真図版 7 沼の上出土土器



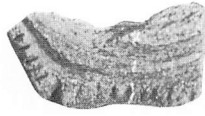
写真図版 8 沼の上出土石器、クルミ・雲母鉄鉱。



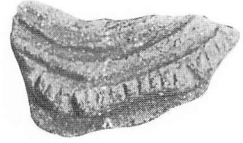
写真図版9 沼の上出土土器



18



22



23



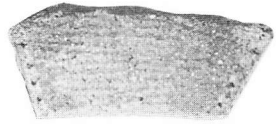
25



26



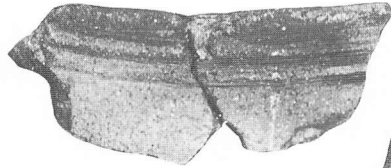
27



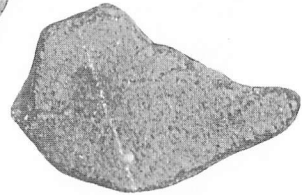
24



29



28



19

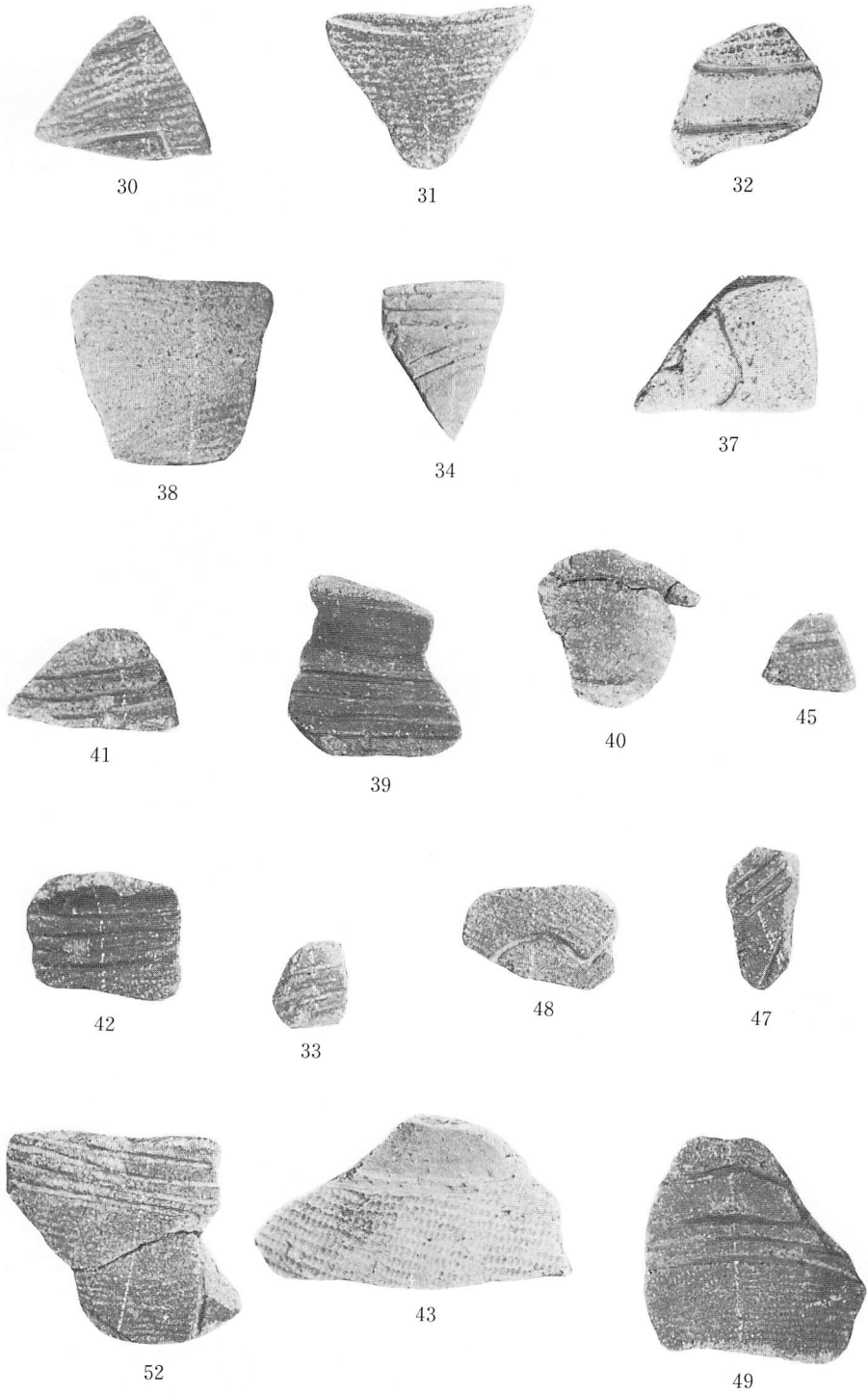


20

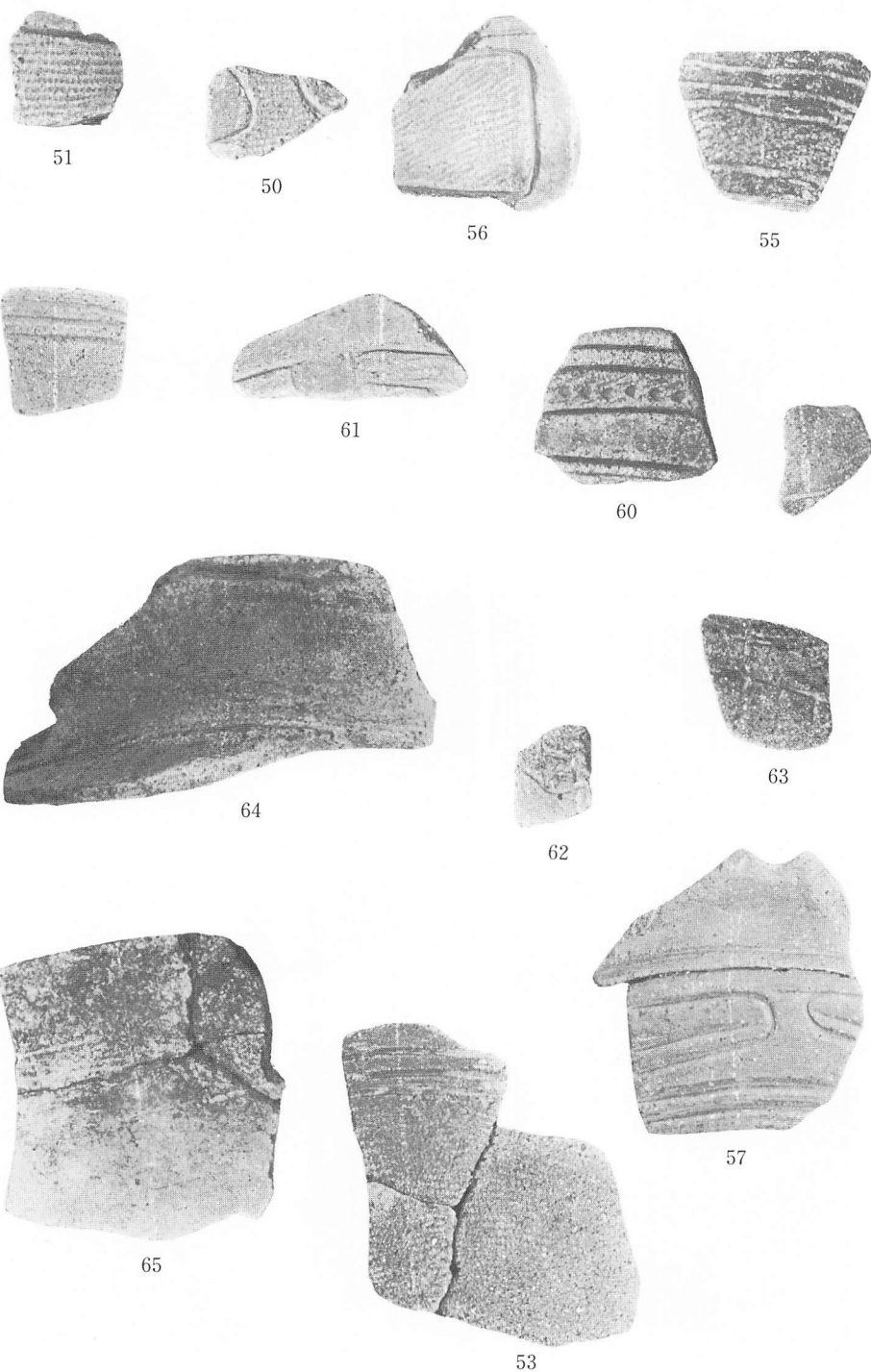


21

写真図版10 沼の上出土土器



写真図版11 沼の上出土土器



写真図版11 沼の上出土土器

岩手県埋文センター文化財報告書第5集

江刺市沼の上遺跡
(昭和52年度)

発行 昭和53年3月30日

発行者 (財)岩手県埋蔵文化財センター
岩手県盛岡市向中野字向中野39-1
(〒020 TEL 0196-35-6622)

印刷者 山口北州印刷株式会社

© 岩手県埋文センター 1978
